

『救世主』の歌人クロプシュトック

(一七二四年—一八〇三年)

Der Messiasänger Klopstock (1724-1803)

高橋 克己

人文学部独文研究室

TAKAHASHI, Katsumi

Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät

要旨 (Summarium)

[第46巻・縦組]

六一(61)頁

(1) 「崇高」と「不可思議」(Das „Erhabene“ und das „Wunderbare“)

六一(62)頁—六三(63)頁

(2) 「詩歌芸術」と「創造の精神」(Die „Dichtkunst“ und der „Geist Schöpfers“)

六三(63)頁—六五(65)頁

(3) 「構想」と「着想」(Der „Plan“ und die „Idee“)

六五(65)頁—六七(67)頁

(4) 「ドイツ詩歌の父」(Der „Vater der deutschen Poesie“)

六七(67)頁—六九(69)頁

(5) 「音楽性豊かな詩人」(Der „musikalische Dichter“)

六九(69)頁—七二(72)頁

註解 (Anmerkungen)

七二(72)頁—九〇(90)頁

Zusammenfassung / Sommaire

九一(91)頁—九二(92)頁

Inhalt : Table des matières

九二(92)頁

要旨 (Summarium) 約八〇〇字

『救世主』を歌い出す時クロプシュトックが念頭に置いていた「崇高」の概念は、何より先輩ポードマー達の詩論で話題の中心とされた「不可思議」を内容としており、この点ミルトンの『失樂園』と共に彼の宗教叙事詩をも「無限なるものの芸術」に数え入れることができる。そして言わば無限の憧憬に駆られた西欧キリスト者のこうした情感文学の対極に、シラーなら古代ギリシア人ホメーロスが代表する素朴文学を位置づける。すると『救世主』の歌人は、キリスト教の宗教詩人として際立ち、異教の詩歌女神ムーサ達の神話圏から遠ざかり気味となる。これに対し本論は例えば『救世主』成立事情を物語る詩人のポードマー宛書簡で言及された「ホメーロスから溢れた(古典の聖)火」(ignes ex Homero hausos)をも留意し、キリスト教西欧と古典ギリシアとのイタリヤ文芸復興以来の相互浸透を重視する。つまり「崇高」の概念は、その根を異教圏ギリシアの聖火にもつとよめる。

当時十八世紀に敢て「私達はギリシアのも、ローマのも、どちらの手本も不要なのだ。」と表明し、専ら「聖書の崇高さ」を規準に、これを書き記した使徒に見合うような「靈感を受けた人々」をのみ許容した詩人ブレイクは、一見した所クロプシュトックと立場を異にしているように映る。しかし他方コールリッジが「(本来の)詩想によらず、むしろ(在来の)詩語へと翻訳された思想」に過ぎぬと見限った「無類の手腕と巧妙さとのあの驚嘆すべき成果、ポープの『イীরリアス』訳」を前提とすれば、両詩人は「靈感の偉容」において親和し、古代の『崇高論』でロンギノスが力説した点、「すなわち詩篇『イীরリアス』に溢れるあの緊迫、平板にならず、決して格調が落ちることなきあの崇高さ、途絶えることなき悲壮美のあの進み」において「ホメーロスから溢れた古典の聖火」を受け継ぐに相応しい筋に入る。そして『救世主』も『失樂園』同様この古典の伝統にこそ繋るのである。

『救世主』の歌人クロプシュトック (一七二四年—一八〇三年)

高橋克己

(1) 「崇高」と「不可思議」(Das „Erhabene“ und das „Wunderbare“)

『救世主』(一七四八年—一七三年)の歌人クロプシュトックが、『失樂園』(一六六七年)の詩人ミルトンを範としたことは、まず歌人自身の発言に見られる。それは一七四八年八月一〇日のボードマーあて書簡で、ドイツ文でなくラテン文である。二十四歳の若者は、二十六歳年上の先輩を尊敬して「父 (Pater)」と呼び、まずボードマーとその盟友フライティンガー (一七〇一年生)の「文芸批評の著作 (scripta critica)」を褒めておいてから、『失樂園』を物した英国詩人に触れる。「実際ミルトンですが、もし先生が訳されていなければ、恐らく非常に遅く私はこれを知ったことでしょう。ところが思いがけなくも (先生の) ミルトン (訳) が私の手に入るや、これは立所にホメーロスから溢れた (古典の) 聖火を心の内奥にまで燃え立たせ、そして魂を高揚させ天へと、そして宗教の詩へと導き上げました。」

ボードマー訳『失樂園』は散文でなされ、初版一七三二年以来、一七四二年、一七五四年、一七五九年、一七六九年、一七八〇年と改訂されている。ここで問題なのは、話題の書簡にもある通り、第一に「叙事詩人の (あるべき) 姿 (imago poetae epicus)」であり、この際に「崇高論 (de Sublimi tractatio)」が重要な役割りを果している。つまり当時ロンギノスの著書と看做された『崇高論 (Theol. Spousus)』を忘れることができない。但し「崇高」の問題は、古代ならホメーロスを念頭に置いているのであるが、クロプシュトックたちの場合はこれにミルトンが重ね合わされる。すると「崇高」に「不可思議」が並記され、フライティンガーの「批判的詩論 (Critische Dichtkunst) (一七四〇年) 続篇の第四節「翻訳術について」の初めの方で、「崇高 (erhaben) かつ不可思議 (verwun-

dersam) な形容や描写」が、独訳ミルトンに関連して言及される。

「ミルトンは翻訳においても原典と同じ崇高かつ不可思議な形容や描写を、正に適切に私達に示すに違いない」と、フライティンガーは述べている。同年ボードマーは『詩における不可思議について、および不可思議と真実らしさとの結びつきについて、ミルトンの失樂園の詩を擁護しての批判的論文 (Critische Abhandlung von dem Wunderbaren ...) (一七四〇年)』を公刊し、盟友と同じく不可思議 (Wunder) を扱っている。この言葉の裏には『聖書』でなじみの奇跡 (Wunder) があり、古典ギリシア造形の有する「真実らしさ」と対比される。しかし眼目はボードマーの論文名が示す通り、両者の「結びつき (Verbindung)」にあり、キリスト教に特有な不可思議を古典造形と調和させることが課題である。実際ミルトンという人文主義の古典教養豊かな清教徒が、クロプシュトックの範となるのも、この古典ギリシアとキリスト教西欧との「結びつき」の点にまず求められる。

実の所ダンテ以来の文芸復興ルネサンスの理想がここにあり、後に『パンと葡萄酒』(一八〇〇年—一〇一年)で古典ギリシアとキリスト教西欧との「結びつき」を本格化して取り上げるヘルダーリンが、当詩歌の第二節冒頭を「不可思議 (Wunderbar) ……」(第一九句)と歌い始める時も、同様の理想が課題となっていると考えられる。ついに『パンと葡萄酒』で円熟するまで、ドイツ抒情詩は『救世主』が産声をあげた時から、約半世紀にわたり同じ課題の継承発展が続く。両者の間には『ギリシアの神々』(一七八八年)や『芸術家』(一七八九年)といったシラーの雄篇が控えている。他方クロプシュトック以前のブロックスやハラールの詩歌には、未だこの課題が担われていない。また『救世主』が歌い始められた十八世紀中葉、一応イギリスには碩学グレイが名高い『悲歌 (Elegy)』(一七五一年、独訳一七七一一年)など佳作を物しているもの、もはや博識を話題の高邁な理想へと駆り立てる活力はなかった。

昔日十七世紀イギリス清教徒革命の時代にミルトンにより達せられたほどの詩歌の充実は、『フランス革命』(一七九一年)を歌ったブレイクとか、『抒情歌謡集(Lyrical Ballads)』初版(一七九八年)を匿名で上梓したワーズワスたち所謂ロマン派の俊才を待たねばならない。主にその成果は十九世紀に花咲く。『パンと葡萄酒』と通底する『ギリシアの壺に寄す頌歌』を、二十三歳のキーツが歌うのは一八一九年である。この頌歌成立に先立つ二年前、若き詩人は英国博物館で本物の古典期ギリシア彫刻に触れており、西欧キリスト者にとり意味深長な真善美(Kalokagathia)の体験が前提となっている。同様の抜きさしならぬギリシア体験をヘルダーリンも『パンと葡萄酒』で踏まえている。他方クロプシュトックやミルトンの場合は、これほど切実な古典美との出会いはない。確かにヴィンケルマンの『ギリシア芸術作品模倣論』(一七五五年)の前と後とは、古典美の了解に質的な差が認められるようである。

それにもかかわらず『救世主』や『失樂園』の詩人は、やはり真剣に古典詩文と取り組んだと考えられる。つまり先程のポードマー宛書簡でクロプシュトックが、「ホメーロスから溢れた(古典の聖)火(ignes ex Homero haustus)」と語っている筋が重要である。この故にミルトンは『失樂園』第三書で、単数の「天上の詩神(the heavenly Muse)」(第一九句)のみならず、複数の「詩歌女神(the Muses)」(第二七句)についても語り、クロプシュトックは『救世主』第一歌で「聖なる詩神(heilige Muse)」(第五六九句)を、唯一の神ならぬ「神々の語り(die Rede der Götter)」(第五七三句)に関連させる。すでに『神曲』(一三一九年)におけるダンテにも類似のことが見い出せる。その『地獄』第四歌で「至高の詩人ホメーロス(Omero poeta sovano)」(第八八句)は、「ソークラテースやプラトーン」(第一三四句)たちと共に古聖所(Limbo)に居る。

(2) 「詩歌芸術」と「創造の精神」(Die „Dichtkunst“ und der „Geist Schöpfer“)

古聖所は「聖書」の「ルカ福音書」第一六章にある「アブラーハムの懐(Abrahams schos)」(第二二節)にあたり、更に『マタイ福音書』第八章を参照すると、イエスの言葉としてこうある。「多くの者が東方や西方から来て、アブラーハム、イサーク、ヤコブと共に、天国(Himmelreich)に座す」(第十一節)。もし『聖書』を素直に読めば、「アブラーハムの懐」は「天国」と看做される。ところが『聖書』よりも、歴代の教父の權威を重んずる中世スコラ神学は、イエスを知らなかったアブラーハムたちをまず古聖所に置き、後に復活したキリストにより「天国」へと引き上げられたと考えた。一応ダンテはそれに従いつつも、空になったはずの古聖所に古代の詩人や哲学者を入れ、この者たちに敬意を表したのである。そうした上で『天国』第二四歌の終結近くにおいて、ダンテは暗に「至高の詩人ホメーロス」たちをも、「モーセ」の仲間に加えているように見受けられる。

「真理、それはここ(天国)より雨降る、／モーセや預言者たちを通じて、詩篇や／福音書を通じて、それに汝ら書き記せし者たち(voi che scriveste)を通じて、／燃える精神(Uardente Spirito)により気高くあれし後に(書き記せし汝らを通じ)」(第一三五句―第一三八句)。恐らく「至高の詩人」とまで言われる「ホメーロス」が、「燃える精神」と無縁だとは考え難いであろう。従って「それに汝らを通じ(a per voi)」(第二三七句)という表現で、「聖書」とは別の古典を念頭に置くことができよう。しかも古典にはアウグステイヌスの『告白』のような教父著作集のみならず、ホメーロスの『イーリアス』のような「詩歌芸術」も含まれると考えられる。この点クロプシュトックは、前世紀の清教徒ミルトン以上に、「詩歌芸術」との親しみを抱いてこう歌う。「しかし、おお業よ、神のみが遍く認める(救世主の偉)業よ、／詩歌芸術(Dichtkunst)

もまた闇の彼方より、汝に近付くのを許されるだろうか? / 詩芸を聖化せよ、創造の精神 (Geist Schöpfer) よ、…」(『救世主』第一歌、第八句一第一〇句)。

当面冒頭では、「詩歌芸術」に足りない「創造の精神」を求めているように見える。しかし第一歌の後半にいたると、詩人の自覚が天使に向かい堂々と物語られる。「もしかつて孤独な楽しみで心溢れ、詩人が深く物思いに沈み、/ 静かな恍惚の明澄な境地に浸ったなら、/ また諸々の精神の想念とともに、その(詩人の)物思いが一つとなり、/ 心開かれた魂 (die enthülte Seele) が、神々の語りに耳傾けたならば、/ そうならば聞け、詩人の言うことを、熾天使エロアよ、…」(第五七〇句一第五七四句)。古典古代において「神々の語りに耳傾けた」「開かれた魂」が確かめられる所、それは何よりホメーロスの叙事詩『イーリアス』である。未だミルトンにはない新たな一步が踏み出されている。公然と「詩歌芸術」と「創造の精神」は、両者相まって高邁な理想を目指している。やがてヘルダーリンの「至福なるギリシア」(『パンと葡萄酒』第五五句)に至ると、双方の相互補完性は一層と密なものとなる。

『失樂園』においてミルトンは、「詩歌芸術」の筋を表に出さず、抑制気味に控えている。ところが、それは隠しようがない。鋭い知性の人ブレイクは、後期の詩篇『ミルトン』(一八〇四年)の「序文」で、この点を指摘している。すなわち「ミルトン」が「愚昧なギリシア・ローマの奴隸剣士達から、蔓延する病弊と感染をうけ、馬銜鎖をはめられて」といふと、ブレイクは述べ、更に「私達はギリシアのも、ローマのも、どちらの手下 (models) も不要なのだ」と表明し、専ら「聖書の崇高な (the sublime of the Bible)」を規準に、これを書き記した使徒に見合うような「靈感を受けた人々 (inspired men)」を範としている。ここで「蔓延する病弊と感染」と言われているのは、韻律法や文体のことに違いない。そして何より「靈感 (inspiration)」が、ブレイクの場合これ

らに対立している。

『ミルトン』の詩人は、古代ギリシア由来の「詩歌芸術」を、「靈感」に「燃える精神」から峻別する。ところが『救世主』でホメーロス風ヘクサメトロン(六歩格)詩型を活用するクロプシュトックは、これと正反対のことを企てている。そして『失樂園』こそ、この方向を助長する格好の先例と、少くともドイツ人には思えたのである。ならば英国の文芸批評が、一様にブレイクに同調したかと言うと、そうではない。例えば『抒情歌謡集』をワーズワスと共同執筆したコールリッジは、『文芸評伝 (Biographia Literaria)』(一八一七年)第一章で、「自然な言葉 (natural language)」に「ホメーロス」や「ミルトン」の「韻律 (metre) や語法 (diction)」を関連させ、これらを「最大限の楽しみをもって、私達が一度読んだというのでなく、繰り返し読む詩歌」と看做している。そして同類の古典作品には、「感情の尽きることなき底流 (a continuous under-current of feeling)」が確かめられるとの旨である。

恐らくブレイクも『失樂園』に、「感情の尽きることなき底流」を認め、これを「繰り返し読む詩歌」と称えるであろう。だが『ミルトン』第四一版面で筆者がミルトン自身に語らせているように、「靈感の偉容 (grandeur of inspiration)」(第二句)を重んじて、「合理的論証を放棄する」(To cast off rational demonstration) (第三句)、つまり「ベーコン、ロック、そしてニュートンを放棄すること」(第五句)が肝要である。すると「韻律や語法」も一種の「合理的論証」に過ぎなくなる。念頭にあるのは啓蒙期十八世紀を特色づける分別悟性の詩風であり、コールリッジも触れている「ポープとその後継者たち」の成果に他ならない。前述の『文学評伝』第一章ではこれについて、「無類の手腕 (talent) と巧妙な (ingenuity) とあの驚嘆すべき成果、ポープの『イーリアス』訳」を取り上げて、こう述べる。「いつも句読点が各二行目の句末に見込まれ、全体が言わば連鎖した…寸鉄詩 (epigrams) である。

とにかく内容と語法 (diction) との特色づけが、(本来の) 詩想 (poetic thoughts) によらず、むしろ (在来の) 詩語 (Language of poetry) と翻訳された思想 (thoughts) によっているように私には思われた⁽⁸⁰⁾。ブレイクのミルトン批判は、「(在来の) 詩語⁽⁸¹⁾」から「(本来の) 詩想⁽⁸²⁾」を峻別し、これを本源の姿へと純化する意図を有する。こうして分別悟性の「合理的論証⁽⁸³⁾」は拭い去られ、詩歌作品に然るべき「靈感の偉容⁽⁸⁴⁾」が獲得されることになる。もはや誰でも手続さえ踏まえれば機械化して仕事ができる科学は問題外で、それに変わり一回限りの芸術家の労作が求められる。少くとも通称ロンギノス著『崇高論』が賞讃するホメーロスは、何よりそのような「靈感を受けた人⁽⁸⁵⁾」であり、この「ホメーロスから溢れた (古典の聖) 火⁽⁸⁶⁾」がクロプシュトックを、更にはミルトンやダンテをも激励したと考えられる。すなわち『崇高論』第三章で古代の「アルキロコス」や「ピンドロス」それに「ソポクレース」について言われた「靈氣 (Daimiton theia) の迸り⁽⁸⁷⁾」(一九九V) が重要なのである。

「靈氣 (ダイモーンの精神) の迸り、これを法 (voloc) の下に置くことは難い⁽⁸⁸⁾」と、『崇高論』の著者は語る。この「靈氣の迸り⁽⁸⁹⁾」を主眼としたホメーロスの詩篇なら、ブレイクとて「蔓延する病弊と感染⁽⁹⁰⁾」の源とは言わぬであろう。だが他方ポープの『イーリアス』訳(一七二五年—二〇年)を念頭に置けば、なぜ『ミルトン』の詩人が「ギリシアの手法⁽⁹¹⁾」をも拒否したのか良く理解できる。つまり「手腕と巧妙さ⁽⁹²⁾」では、「燃える精神 (ardente Spirto)⁽⁹³⁾」の代用とならないからである。しかも事が始源の歌声『イーリアス』となると尚更と思われる。同じホメーロスの作として伝わる『オデュッセイア』でさえ到底比肩できないと評される。「すなわち詩篇『イーリアス』に溢れるあの緊迫、平板にならず、決して格調が落ちることなきあの崇高さ (tr. Subl.)、途絶えることなき悲壯美⁽⁹⁴⁾」のあの迸りは、もはや『オデュッセイア』には見られない⁽⁹⁵⁾」と、『崇高論』

の第九章(一八三V)にある通りで、『イーリアス』がホメーロスの「精神の絶頂期 (Akly) に⁽⁹⁶⁾」(一八三R)、『オデュッセイア』に「老年の特質 (color theas)⁽⁹⁷⁾」(一八三V)があることは否定できない。

かつて先輩ボードマーにクロプシュトックが語った「ホメーロスから溢れた (古典の聖) 火⁽⁹⁸⁾」の本質も、この「靈氣の迸り⁽⁹⁹⁾」に見て差し障りないであろう。但し、古典にも紛う靈氣が、『救世主』の実作で、既に十分と漲っているとは言い難い。むしろ実際にはクロプシュトックから本格化して、ドイツ詩歌にも「靈氣の迸り⁽¹⁰⁰⁾」が始まると言うべきであろう。その範例はプロッケスの浩瀚な詩集『神における地上の楽しみ』(一七二一年—四八年)にも、密度の高いハラ一唯一の詩作成果『スイス詩歌の試み』(一七三二年—七七年)にもない。また当時ドイツ文壇で高名なハーゲドロンとゲレルトにも、これは望み得ない。ところが一七四九年に同名の詩『春 (Der Frühling)』を公刊したクライストやウーツには、クロプシュトックに通じる或る種の「靈氣の溢り⁽¹⁰¹⁾」が感じられる。勿論クロプシュトックが群を抜いているのではあるが、決して『救世主』冒頭三歌章(一七四八年)だけが孤高の位置を占めているとは思われない。むしろ次第に隆起しつつある詩壇の先頭を切り、当三歌章が花咲いた模様である。

(3) 「構想」 と 「着想」 (Der Plan und die Idee)

とにかく『イーリアス』に加えて、『失樂園』が、『救世主』成立には決定的要因となっている。と少くとも、引用したボードマー宛書簡は語っていた。しかしながら晩年クロプシュトックは必ずしもそう言わなかった旨を、『文学評伝』でコールリッジが伝えている。それは第二章と第三章の間に後日挿入された『サティレーンの書簡』(初刊一八〇九年)の第三書簡で、これは著者が友ワーズワスと一緒に一七九八年九月クロプシュトックを訪問した折の記録を収めている。興味深いことにロマン派の二人は、シラーやゲーテに格別会いたいと思わなかった。そのかわりに言わば

クロプシュトゥック詣でを記念碑として残した。今日流布している文学史の通念が妥当しない次元で当時の現実が進展している一例である。同様のことは一七九四年刊ヴィーラント全集の序文で、「著者の人生行路は日の出前のドイツ文学の黎明が終わり初めた時に始まり、そしてそれはその日没と共に閉じられるようである^{②①}。」と述べられているのを、「ヴィーラントの詩神がドイツ詩歌芸術の黎明と共に始まり、その没落と共に終わる。」と了解した二十四歳のヘルダーリンが、「こんな言葉で僕は一週間ふて腐れる^{②②}。」と、一七九四年十一月に書簡で友人ノイファーに告白している場合にも見られる。

確かに初期ヘルダーリンの詩歌『友情の祝祭日』(一七八八年)にも、「わが守護神」(第五〇句)として「クロプシュトゥックとヴィーラントの肖像 (Klopstocks Bild und Welfands)」(第五二句)が現われる。既にこの時一七八八年にはシラーの『ギリシアの神々』が公刊され、その前年にはゲーテの『タウリスのイフィゲーニエ』が印刷されている。だが尚ヴィーラントたちの声望は高かった。実に『ギリシアの神々』が載ったのも、ヴィーラント編『独逸メルクリウス』である。すでに話題とした孤高の詩人ブレイクの作品の中で、独文学者の目を牽くのは、十八世紀末に創作された一篇の詩で、「クロプシュトゥックが英国を侮どりし時 (When Klopstock England defied.) / 立ち上がりしは盛時の物凄きブレイク。 : : ②③」(一七九三年頃)と始まるものである。これなど当時クロプシュトゥックの発言が徒ならぬものであったことを告げる好例であろう。まだまだ十八世紀末はこのようにヴィーラントやクロプシュトゥックの存在が衆目を引きつけていた時代であり、この時一七九八年にワーズワスたち新鋭の俊才二人は、尊敬する異国の齢七十四に達した老大家に直接会見したのである。

さて「ミルトンが…宗教の詩へと導き上げ^{②④}」たとボードマーにラテン語で認めたクロプシュトゥックは、その五十年後ワーズワスに向かいフランス語でこう語ったと、『サティレーンの書簡』でコールリッジは報告して

いる。「今日クロプシュトゥックは僕(ワーズワス)に、ミルトンを読む前に『救世主』の構想(Plan)を仕上げてしまった旨を告げ、自分より以前に同じ道を歩んだ著者を知り狂喜したそうだ。これは但し以前言ったことと矛盾している^{②⑤}。」予めコールリッジは別の日に聞いたことも記している。「クロプシュトゥックは僕たちに、散文訳でミルトンを十四歳の時に読んだと語った。僕自身はこう聞き取った。そしてワーズワスが訳してくれたクロプシュトゥックのフランス語も、僕がすでに解した通りのものだった^{②⑥}。」後に「矛盾(contradiction)^{②⑦}」と指摘される根拠とするため、『文学評伝』の著者は友人が通訳までしてくれた点をも記している。

また別の重要な発言も、ワーズワスに対しなされた。「自作の詩歌に言及ぶと、クロプシュトゥックは僕に、十七歳の時に『救世主』を(歌い)始めた^{②⑧}と述べ、ただの一行も書かぬまま丸三年を構想(Plan)に費やしたと言った^{②⑨}。」以上をまとめると、十七歳で『救世主』を歌い始める前三年が「構想」の期間と考えられ、これは十四歳から十七歳となる。すると「散文訳でミルトンを十四歳の時に読んだ」のであるから、「構想」はミルトン読了後となる。ところが同時にクロプシュトゥックは、「ミルトンを読む前に『救世主』の構想(Plan)を仕上げてしまっていた」とも語る。そこでワーズワスは「矛盾」していると思っただけである。もし老詩人の記憶を不確実なものとして片付けるなら、どれかが間違っていることになる。だが必ずしもそうする必要がなければ、それを越したことはない。同様の「矛盾」はドイツ語の文献に限ってみても出てくる。以下ハーメルンの記述を参考にすると、まず一七九九年十一月十三日ヘルダー宛書簡でクロプシュトゥックが、「この構想(Entwurf)を私が起草し始めたのは、ほぼ六〇年前です^{③①}。」と述べている引用が目につく。ここからハーメルは、十五歳のクロプシュトゥックがポルタ学院(Schola Portensis)へ入学し高等教育(一七三九年―四五年)を受け始めた頃、つまり「十五歳か十六歳のころ」に『救世主』の構想(Plan und Entwurf)が成った^{③②}

と見ている。この想定は、より正確な『文学評伝』の記述にも合う。更にハーメルは一八〇〇年三月二十日に当時ポルタ学院の校長をしていた人物に宛てたクロプシュトックの書簡を引く。そこにはこう記された文面がある。「私はポルタ学院で、『救世主』の構想 (Plan) を、ほぼ全部仕上げたのです。」この点を『文学評伝』の叙述で補えば、入学二年目の「十七歳」の時に「構想」は成り、実作の創作へとクロプシュトックが向かったことになる。そこで『失樂園』のミルトンであるが、これについてハーメルは詩人自身の発言として、接続法第一式で、『救世主』の着想 (Idee) が生じたのは、何らかのミルトンの実作 (etwas von Milton selbst) を読む以前である。②と述べ、このことに関してはポルタ学院卒業の折二十一歳のクロプシュトックがなした「かの名高い祝別の辞 (Abschiedsrede) ③」(一七四五年) を話題とする時も、「詩人は既に『救世主』の着想 (Idee) を擲んで後にミルトンを知った。」と記している。そしてハーメルは、この「着想」の内容を、「救世主を叙事詩の素材 (Vorwurf) とすること」④と説明している。

英語で同じ「構想」とあるのを、このように漠然とした「着想」と、練られた「構想」と区別すれば、『救世主』の「着想」をクロプシュトックが抱いたのは、「散文訳でミルトンを十四歳の時に読んだ」のより以前のことと考えられる。勿論ミルトンのような古典は既にコールリッジの言葉にもあったように、「私達が一度読んだというのでなく、繰り返し読む詩歌」である。『文学評伝』の著者は、ポルタ学院におけるクロプシュトックの同窓生から聞いた逸話として、「若き詩人が『失樂園』の翻訳を殊のほか重んじ、いつも自分の枕下に置いて眠った」ことを報じている。勿論ボードマー訳ミルトンの『失樂園』に違いないが、クロプシュトックが入学した頃には初版(一七三二年)であったけれども、ポルタ学院入学後三年目一七四二年には増補改訂版が出る。実はこの再版が重要で、ここには「詩作 (Kunst des Poeten) についての所見」もボードマーの手

により付け加えられている。また十四歳で読んだ『失樂園』についても諸家の推測するように、ボードマー訳初版ではなくて恐らく「別の翻訳」⑤、例えばベルゲ訳『失樂園』(一六八二年)⑥であった可能性が高い。

(4) 「ドイツ詩歌の父」(Der Vater der deutschen Poesie)

とにかく重要なことは、「ホメーロスから溢れた(古典の聖)火を、ミルトンが心の内奥にまで燃え立たせ」た点である。一応クロプシュトックに影響を与えた側に光をあてれば、このように言える。しかし独創の才に溢れた詩人の心の底から「靈気の迸り」もあつたはずである。実際すでに述べたように、このような内発性こそ『救世主』の詩人の特色でもある。つまり読む前に着想を書き、とめどなく想念が溢れてくるような詩人がクロプシュトックと考えられる。この点でも『文学評伝』は興味深い叙述を残している。例えばコールリッジは卒直にこう記している。「クロプシュトックは、ごく僅かしかミルトン (very little of Milton) を知らないようだ、いや実際の所イギリスの詩人たちについて一般的に言っても、ごく僅かしか知らないようだ。」同様の印象をワーズワスも抱いたようである。「クロプシュトックは英国の諸作家に親しんで (familiar) いないようだ。」と述懐している。確かに英語の原著を読まないものであるから、情報はずと独訳されたもの、或いは仏訳か羅訳の英文学に限られている。従って他にも佳作があるもののドイツ語に翻訳されていないために、「クロプシュトックは『墓碑の悲歌』(一七五一年、独訳一七七年)を除いて、ほとんど或いは何一つグレイ (little or nothing of Gray) を知らなかった。」のである。

ならばこう言うワーズワスが十八世紀ドイツ文学に通じていたのかと言うと、実は直接クロプシュトックに会って、この点で大いに啓発されたのである。例えば英国詩人にとりレッシングの「ナータン」は退屈 (Nathan as tedious)⑦に思われた。そこで不平を言つと、早速「クロ

プシュトックは、その劇中で筋の運び (action) は十分でないが、レッシングがドイツの著作家の中では最も純正 (chaste) であると述べた^②のである。また「クロプシュトックが、ヴィーラントは魅力ある作家で、ドイツ語の最高の達人 (sovereign master) であり、この点ではゲーテとてヴィーラントに比肩できない」と語った^③場合など、ワーズワスの獲る所は大きかったであろう。なぜなら母国語がドイツ語でない英国詩人が、このような洞察に至るのは容易でないからである。勿論十八世紀末の美意識ではあるが、『文学評伝』には「クロプシュトックが有頂点になって、ヴィーラントの文体 (Wieland's style) について語った。」と記されている。

「散文訳でミルトン^④」を読んだわけであるから、クロプシュトックが『失楽園』の「文体」に疎くても仕方ない。他方ワーズワスたちも「レッシング」や「ヴィーラント」の「文体」に通じていなかったのである。但し『批判的詩論』における先のブライティンガの言葉、「ミルトンは翻訳においても原典と正に同じ崇高かつ不可思議な形容や描写を、正に適切に私達に示すに違いない^⑤」との主張にも一理ある。少くとも『救世主』の詩人は翻訳を通じてではあっても、「崇高かつ不可思議な形容や描写」を人一倍『失楽園』から汲み取ったと思われる。しかもそれは逆から言えば、すでに予感し求めているものを俄に察知して読み込んだのである。従ってミルトンを知ってから『救世主』の構想が成ったか、またはその逆か、という問題は、詩人の魂の成長をその内側から見るか、その外側から見るかにより、どちらの場合もそれなりに妥当すると言えよう。

「ごく僅かしかミルトンを知らない^⑥」のにもかかわらず、青年クロプシュトックが『失楽園』の翻訳を、いつも自分の枕下に置いて眠った^⑦のは印象深い。同様に翻訳の『聖書』を枕下に置いて眠った人も数多いことであろう。だが大抵の場合それを「ごく僅かしか知らない」のが実情である。むしろ稀有にして偉大なことは、そのような古典に出会うことであ

る。少くともクロプシュトックは『イーリアス』とか『失楽園』という名著に「(古典の) 聖火 (Gaes)^⑧」を認め、それに自分もあやかるうとした。そして多少なりとも、それに成功したと言うべきであろう。さもなくば異国の俊才がわざわざ「畏敬の念 (impression of awe)^⑨」を抱いて会いに来ることもないし、クロプシュトックを「ドイツ詩歌の尊敬すべき父 (the venerable father of German poetry)^⑩」とまで呼ぶこともあるまい。

この「ドイツ詩歌の父」は但し、愛読した「ミルトンをごく僅かしか知らない^⑪」のみならず、自らの詩壇の先輩についても人に語るほどのものを持たなかった。このことを「サティレインの書簡」で、コルリッツは次のように叙述している。「話題が変わり、文学のこととなると、僕はラテン語で、ドイツ詩歌の歴史 (History of German poetry) と、先輩のドイツの詩人たちについて尋ねた。僕がとても驚いたことに、クロプシュトックはこの話題について、ごく僅かしか (very little) 知らないと言白した。実際クロプシュトックは時折一人か二人の先輩詩人を読むには読んだ。しかし先輩たちの長所 (merits) が語れるほどは読んでいないのだ^⑫」確かに「父」である。その後の詩人はゲーテにせよシラーにせよ、クロプシュトックの「長所」を語るにやぶさかでない^⑬。ところが当の「長所」を「父」が、自分の祖先に探すことは容易でない。

一応クロプシュトックの論文『詩歌の言葉について』(一七五八年)には、「ルター、オーピッツ、そしてハラール^⑭」の三人が、抜きん出た「偉人^⑮」として名を挙げられている。成程ルターもオーピッツもドイツ詩史上重要である。しかし両者とも十七世紀以前の古い「偉人」であり、言わば十六世紀と十七世紀の代名詞に過ぎないと言える。これに対し「ハラール」と共に挙げるべきは、すでに当論でも触れたプロッケスであろう。つまり前者の『スイス詩歌の試み』(一七三三年―一七三七年)と、後者の『神における地上の楽しみ』(一七二二年―一七四八年)が、クロプシュトックの『救

世主』(一七四八年—一七三年)に先行する代表作であり、「一人か二人の先輩詩人」を語るならまずこの二人であったと考えられる。ところが双方とも『救世主』の詩人にとっては、散文訳の『失樂園』ほどの深い感銘を与えなかったようである。

そこでプロッケスやハラーには期待薄で、「ミルトンないしはクロプシュトック」に望み得るものを考えると、シラーが『素朴文学と情感文学について』(一七九五年—一七九六年)において述べた「無限なるものの芸術(Kunst des Unendlichen)」が浮上する。しかもシラーはここで、これが「ホメーロス」に欠如している点も指摘している。やがてロマン派ノヴァーリスが『ザイスの学徒』(一七九八年—一七九九年)第二章で「無限の憧憬(unendliche Sehnsucht)」を語り、これに濃淡細やかな陰影が加味され、その『夜の讃歌』(一八〇〇年)で「無限なるものの芸術」は新たな衣をまとい、ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』(一八〇〇年—一八〇一年)へと受け継がれてゆく。そして前述の「不可思議(Wunderbar)……」の句が、この第十九句に来る。このような「無限」と結びついた「不可思議」こそ、「崇高」な「イーリアス」には未だない近代芸術の新機軸であり、正に『失樂園』に見たこれをクロプシュトックが『救世主』で打ち出し、「ドイツ詩歌の尊敬すべき父」となるに至ったと考えられる。

(5)「音楽性豊かな詩人」(Der „musikalische Dichter“)

「不可思議な形容や描写」を生み出す「無限なるものの芸術」として『失樂園』や『救世主』は、ルターが『聖書』の「詩篇」一一九の一〇五への講解で述べたように、「耳に聞こえ(auribus percipitur) 目に見えぬ(Oculis non videtur) 神言によつてのみ導かれぬ(solo verbo duci)」のが本来であろう。実際ミルトンは失明してから『失樂園』を創作しているので、その第三書の歌い始めで、神の「創造されたる本質(essence increate)」(第六句)より溢れた「聖なる光明(holy Light)」(第一

句)に呼びかけ、「汝に私は再会する、確かに、／そして感ずる(Feel) 汝の至高の生命の燈火(Lamp)」(第二句—第三句)と語る時、視力で「感ずる」のではない。むしろ不可視の「光明」は音楽のように盲目の詩人の心眼を満たすと考えられる。そしてミルトンのこのような「光明」がクロプシュトックの場合、「ホメーロスから溢れた(古典の聖)火を心の内奥にまで燃え立たせ」たのであろう。

こう言つて良いほど、シラーも認めるごとく、クロプシュトックは「音楽性豊かな詩人(musikalischer Dichter)」と言える。但し欠点も長所に同居している。『素朴文学と情感文学について』においてシラーは続ける。「詩歌の音楽性を踏まえれば『救世主』は見事な創作(herrliche Schöpfung)であるが、…詩歌の造形性の点ではなお幾多の不満が残る。」この「造形(plastisch とか bildend)」において、彫塑美の古典『イーリアス』にシラーが見た「かわいた真実味(trockene Wahrhaftigkeit)」つまり「ホメーロス自身が胸中に何ら心(Herz)を持つていないかの如き(as ob)」と言われる現実が念頭にあることは疑い得ない。従つてクロプシュトックに対してホメーロスが、ミルトンのように「心の内奥にまで燃え立たせ」る力を有しなかったことも、この脈絡から理解できる。この「心」には先のシラーの言葉で「無限」が宿るわけであるが、この「無限」ほど古代ギリシアの詩人ホメーロスに疎遠なものはない。

シラーの巧妙な対立二元論は、造形美の古典ギリシア世界の対極に、「ドイツ詩歌の父」たる「音楽性豊かな詩人」を置き、「クロプシュトックの詩神は、そのキリスト教同様、純潔無垢、超俗、非肉体的、神聖である」と述べる。つまり「その本領は常に理念の世界(Ideenreich)」あり、「あらゆる感情は感性を超えた源泉から溢れ、しかもクロプシュトックはこれらの感情を実に親密(intim)に実に力強く私達の心の中に目覚めさせる術を心得ている」と言つてことである。これは他面シラー自身

を含むドイツの詩人の姿でもある。その筆頭にシラーの言う「青春の偶像 (Abgott der Jugend)^⑧」である『救世主』の詩人がいる。実際ゲーテも『詩と真実』第二部(一八二二年)第一〇書の初めの方で述懐している。「万事がクロプシュトックにおいて合致し、そのような時代を築くことになる。この人物は心身両面において純粋な若者 (reiner Jungling) であつた^⑨。」

純粋なクロプシュトックの神界には素直に流れる透明な心情が溢れる。この点から、「神話のメルクリウスやアポロンたちは、キリスト教の精髄である外なる天使ラファエルや内なる天使エロアほど神々しく、私達に思われない^⑩。」と言える。こう主張するシャトーブリアンの念頭にあるのは、クロプシュトックの『救世主』第一歌で熾天使エロアが話題の詩節(第一八九句―第三〇二句)である。当著『キリスト教精髄』(一八〇二年)第二部で話題の詩節を仏訳で引用(第四書、第一〇章)する前に、シャトーブリアンは『救世主』における「悔悛の(墮)天使アバドナ (Abbadona, ange repentant) の性格^⑪」を褒めたついでに、「クロプシュトックはまた自分より以前に知られていなかった神秘的な熾天使たち (seraphins mystiques inconnus) を色々と創作した^⑫。」(第一書、第四章)と述べている。

当然エロアが「知られていなかった神秘的な熾天使たち^⑬」の代表で、特に『キリスト教精髄』ではこれを「内なる天使エロア (Eloa, l'ange intérieur)^⑭」と呼び、「外なる天使 (l'ange extérieur)^⑮」のラファエルと区別している。すでに『失樂園』においてラファエルは、その第五書より第八書にかけて活躍する熾天使である。ところが『キリスト教精髄』によれば、「ラファエルは外なる天使^⑯」に過ぎず、ミルトンにも「知られていなかった神秘的な熾天使」「エロアが内なる天使^⑰」とされる。ここに内面性 (Innerlichkeit) に溢れる「音楽性豊かな詩人^⑱」の面目躍如たる点が指摘されている。つまり浄化する音楽の精髓が『救世主』の「内な

る天使エロア」において見事に具現され、この清純な基調は「悔悛の墮天使アバドナ^⑲」の物語(第五歌後半、第九歌後半、第十三歌中央部、第十九歌前半)にまで浸透している。確かに墮天使の悔悛そのものも、それ以前の詩人ミルトンたちにはない、いかにも「純粋な若者^⑳」ならではの着想と言えよう。

このような「音楽性豊かな詩人^㉑」の対極に、造形の巨匠ホメーロスがいる。そしてシラーがこのギリシア人の「かわいた真実味^㉒」について語る時、念頭にあるのはフォス訳『イーリアス』(一七九三年)である。それ以前のシュトルベルク訳『イーリアス』(一七七八年)なら、当訳者が詩歌『ホメーロス』第六句で語る「詩歌の聖なる大河 (Gesanges heiliger Strom)^㉓」が中心となり、このような「靈気の进り^㉔」がクロプシュトックにも「ホメーロスから溢れた^㉕」と考えられる。但し、『女性論』(一七七二年)でデイドロが、「女性達は驚かせる、クロプシュトックの熾天使らのごとく美しく、ミルトンの悪魔らのごとく恐ろしく^㉖」と語っていることから解かるように、「靈気」と言っても『救世主』のには魔神風ダイモーンの要素が希薄と言える。また更にフォス訳の場合は『崇高論』第九章で話題の別の面、つまり「あからさまな真実 (Altehrlichkeit) に由来する想念に満ちあふれたもの^㉗」(一八三V)が前面に押し出される。こうなると「純粋な若者^㉘」は、もはやついでゆけない。しかしながら新たな時代は、むしろ「かわいた真実味^㉙」を古典造形より析出することになる。

『文学評伝』の「サティレーンの書簡」でコールリッジは、クロプシュトックがワーズワスにこう述べたと伝えている。「フォスはその『イーリアス』訳でドイツ語の慣用法 (Idiom) に暴行 (Violence) を加え、ギリシア語の生け贄にしてしまった^㉚。」もし長生きして『救世主』の詩人が、ヘルダーリンの『アンティゴネー』訳(一八〇四年)に触れたなら、一層と凄まじい「暴行」を話題とするであろう。実際この群を抜いた古典ギリシアの友が企てた訳業に対しては、シラーたちでさえついでゆけなかった

のであるから。だが「あからさまな真実^①」を求める渴望を止めることはできない。むしろそれを古典造形より析出する鋭利な知性は、クロプシュトックの言う「暴行^②」を敢て辞さない。この知性の代表が、詩人ではシラーであり、哲学者ではカントであった。恐らくフォス訳『イーリアス』に劣らず、『純粹理性批判』の文体は「ドイツ語の慣用法に暴行を加え^③」「あからさまな真実^④」の「生け贄にしてしまった^⑤」と言えよう。

興味深いことにクロプシュトックがワースワスに語った所によると、「シラー^⑥」は「やがて忘れられるに違いない^⑦」そうであるし、「カントの名声はドイツで相当な落ち目で (much on the decline) ある^⑧」とのことである。もはや『救世主』の詩人の時代錯誤は否定できない。他方ゲーテに關しても瞠目すべき発言がなされた。「その『ヴェルテルの悩み』が、ゲーテの最高傑作 (Best work) で、他の劇作はどれもこれに比肩できない^⑨」との旨である。確かに「純粹な若者^⑩」に留まり続けている七十四歳の老詩人こそ、永遠のヴェルテルの名に値する。すでに「若きヴェルテルの悩み」(一七七四年)の著者自身は、『タウリスのイフィゲーニエ』(一七八七年)など「他の劇作^⑪」で、一層と古典ギリシア造形の「あからさまな真実^⑫」へと歩み寄っている。ところが『救世主』(一七四八年—七三年)の詩人は、自らこの雄篇を歌い上げた古き良き時代に留まり続けているように見受けられる。

文学史上ドイツでは「啓蒙主義 (Aufklärung)」が「感傷主義 (Empfindsamkeit)」へと変貌を遂げ、更に「疾風怒濤 (Sturm und Drang)」へと展開する時期に、『救世主』の諸詩篇は成立している。この成果にレッシングも驚嘆して、その冒頭五歌(一七五一年)がまとめて公刊されると同年五月の書評で、「当作品の詩的な美しさ (die poetischen Schönheiten) を感受 (empfinden) しない人々^⑬」の「心は荒んで (verwahrloset)^⑭」いると批判する。だが鋭い批評家は同時に、やたら「驚嘆に耽る (sich in Bewunderung verliert)^⑮」ことの空虚な面をも見逃さない。

後に時代の産物たる『救世主』は感傷と疾風怒濤の思潮が過ぎると、読者をうんざりさせるようになる。その証左がコールリッジの場合で、「僕が讀んだ『救世主』は、…冒頭四歌だけだ^⑯」と告白し、「正にドイツのミルトン (German Milton) だ全く!!!^⑰」と皮肉で終わることになる。しかしながら正に『救世主』においてこそ、「ほば言葉は、…堅いドイツ語たることを止め、調べ (Toh) となり、黄金の琴線の和音となる^⑱。」と、一七七三年『救世主』全一〇歌完結の時に、耳の人ヘルダーが述べていることも傾聴すべきである。確かに「音楽性豊かな詩人^⑲」という点で、その名に値するシラーやヘルダーリンたちに対し、クロプシュトックが及ぼした影響は実に甚大であったと考えられる。

但し思想抒情詩 (Gedankenlyrik) の巨匠ヘルダーリンたちは、一応クロプシュトックの格調高い純粹な調べに新機軸を見いだしたものの、煮詰められた思念の脈動が『救世主』には欠如していることも見抜いたことであろう。この点については『オシアン論』(一七七三年)でヘルダーが、詩人を二様に分類して、「滔々と歌う箇所におけるクロプシュトック^⑳」を、「ミルトン、ハラー、クライスト^㉑」と区別としている点が考量に値する。すなわち「この者たちは筆を執らず、長く思念した^㉒」のに対し、クロプシュトックの場合は止み難く想念が次から次へと沸いてくる模様である。確かに尽きせぬ迸りにおいて一頭地を抜いた『救世主』ではあったが、そこには未だ溢れる抒情が練られた思想と相互浸透していない。従って更にハラーの濃厚な教訓詩の成果をも踏まえて、後にシラーが両者の相互浸透への道を大きく開き、シラー学徒ヘルダーリンがこれを一層と徹底させることになる。

すると後世ヘルダーリンの場合には、シラーの雄姿に隠れて、ハラー諸共クロプシュトックも日陰者となるかと言つと、そうではない。実際シラーには共に重要であった双方のうち、ハラーはヘルダーリンに深くかわからず、専ら『救世主』の詩人のみが意味を持つ^㉓。これは破格の対象キリス

トを歌う敢為ゆえでもあるが、恐らくそれ以上に「音楽性豊かな詩人⁸⁵⁾」としてクロプシュトックがシラーよりも純正だからであろう。その眼目は既に引用したシラー自身の言葉が示している。つまり「あらゆる感情は感性を超えた源泉から溢れ、しかもクロプシュトックはこれらの感情を実に親密に力強く私達の心の中に目覚めさせる術^{すべ}を心得ている⁸⁶⁾」からである。この点シラーは、ヘルダーリンやクロプシュトックに比すと、むしろ分別と教訓の詩人ハラーに近くなる。勿論シラーも「音楽性豊かな詩人⁸⁵⁾」には相違ないが、その純度が『救世主』の詩人の方が高いと言えるのではなからうか。

註解 (Anmerkungen)

※詳細は欧文註解に記載

- (1) クロプシュトック『作品・書簡集』(歴史批判版ハンプルク版)「書簡集その一」(一七三八年―一五〇年)一九七九年、一四頁。
- (2) プライティンガー『批判的詩論』(一七四〇年)写真復刻版一九六六年、続篇一三九頁―一四〇頁。「不可思議と真実らしさとの結びつき」(本篇一三三頁)。
- (3) ヘルダーリン全集シュトゥットガルト版、一九四六年―七七年、第二巻、九〇頁。
- (4) ミルトン『失樂園』再版(オデュッセイア出版社)一九六二年、六一頁。註(25) 独訳一〇五頁。

- (5) クロプシュトック『救世主』第一歌―第三歌(初版一七四八年)復刻一八八三年(DLDの十二)、再版一九六八年、二二頁。
- (6) ダンテ作品集、伊国ダンテ協会刊、再版、一九六〇年、四五七頁―四五八頁。
- (7) 一五四五年版ルター訳『聖書』写真復刻版一九六七年、続篇、二四九頁。二九〇頁。
- (8) ダンテ作品集、七六五頁―七六六頁。
- (9) 『救世主』第一歌―第三歌、三頁。
- (10) 『救世主』第一歌―第三歌、二二頁。
- (11) ヘルダーリン全集、第二巻、九二頁。
- (12) プレイク詩集、註釈版英国詩人(ロングマン社)、一九七二年、四八七頁―四八八頁。
- (13) コールリッジ『文学評伝』(オクスフォード大学出版)一九五四年、第一巻、一三頁―一五頁。
- (14) プレイク詩集、五六三頁。
- (15) 『文学評伝』第一巻、十一頁。
- (16) ロンギノス『崇高論』希独対訳レクラム文庫(原典は一九一〇年刊トイブナー古典叢書ライプツィヒ版第四版)一九八八年、八二頁(第三章)。
- (17) 『崇高論』二八頁(第九章・第一三節)。
- (18) ヴィーラント全集(ゲッシュェン版、一七九四年―一八一二年)写真復刻版一九八四年、第一巻、Ⅲ頁。
- (19) ヘルダーリン全集、第六巻、一三九頁。
- (20) ヘルダーリン全集、第一巻、五九頁。
- (21) プレイク詩集、四六八頁。
- (22) 『文学評伝』第二巻、一七〇頁―一七二頁/一七五頁(ワースワスの覚書)。
- (23) クロプシュトック作品集(DNL・ドイツ国民文学集、第四六巻)第一部『救世主』前篇(一八八四年)「(編者ハーメルの)序論」三八頁/一四二頁。
- (24) 『文学評伝』第二巻、一七〇頁。

(25) ボードマー訳ミルトン『失樂園』再版(一七四二年) 写真復刻版(一九六五年) [編者ベンダーの] 後記「二五頁」。

(26) クロプシュトック『作品・書簡集』「書簡その一」の編者グローネマイヤーは、二〇五頁の註でクラマー(『クロプシュトック』第一部の三七頁) やムンカー(『クロプシュトック』三七頁) に言及しつつ、「ボードマーの散文訳は初版が一七三三年に刊行されているが、しかしクロプシュトックはまず別の翻訳を知ったようである。」と述べている。

(27) ボードマー訳『失樂園』復刻版「後記」二七頁。

(28) 『文学評伝』第二巻、一六九頁―一七二頁／一七六頁―一七八頁(ワースワスの覚書)。

(29) ゲーテなら「若きヴェルテルの悩み」(一七七四年)の二七七一年六月十六日付書簡末尾の「クロプシュトック」(作品集ハムブルク版、一九八二年、第六巻、二七頁)、シラーなら「素朴文学と情感文学について」(一七九五年―九六年)で「情感詩人(sentimentalische Dichter)」(全集ヴァイマル版、第二〇巻、一九六二年、四三六頁)の「悲歌部門」を論じた折に「クロプシュトック」を「音楽性豊かな詩人」と呼んだ場合(四五五頁)。

(30) クロプシュトック作品選集ハンザー版一九六二年、一〇二四頁。『詩歌の言葉について』

(31) シラー全集ヴァイマル版、第二〇巻、四三九頁―四四〇頁。『素朴文学と情感文学』

(32) ノヴァーリス著作集四巻本ライプツィヒ版一九二九年、第一巻、二六頁。『ザイスの学徒』

(33) ルター『詩篇講義』(一五二三年―一六六年)「詩篇」一一九の二〇五への講解。ヴァイマル版全集、第四巻(一八八六年)三五六頁。

(34) ミルトン『失樂園』六〇頁―六一頁。「私(心眼で)見て語る(see and tell)」の「のびる」ように、人の目には不可視なことも (things invisible) について。(第三書、五四句―第五五句。六一頁)。

(35) シラー全集、第二〇巻、四三五頁／四五五頁―四五七頁。『素朴文学と情感文学』

(36) ゲーテ作品集ハムブルク版、第九巻、三九八頁。『詩と真実』第二〇書。

(37) シャトーブリアン『諸革命についての試論／キリスト教精髓』(プレヤード版) 一九七八年、六四一頁／七四二頁。

(38) シュトルベルク兄弟全集(二〇巻本(一八二〇年―二五年) 写真復刻版一九七四年、第十一巻、V頁。『イリアス』訳は弟フリードリヒ)。

(39) テイドロ作品集(プレヤード版) 一九五二年、九四九頁。

(40) 『文学評伝』第二巻、一七六頁―一七七頁(註(28))／一七九頁。コールリッジ自身がカントを「ケーニヒスベルクの高名な賢者」と評し絶賛していることは、『文学評伝』第九章(第一巻、九九頁)に詳しい。

(41) レッシング作品集(二五部一九二五年) 写真復刻版一九七〇年、第八部、三九頁―四〇頁。同じ文面は『書簡』(一七五三年)第十八(第八部、一四八頁)でも繰り返しされる。

(42) 『文学評伝』第二巻、一八〇頁。

(43) ヘルダー全集ベルリン版三三巻本(一八七七年―一九一三年) 写真復刻版一九六七年―六八年。第五巻、一八四頁―一八五頁／二五九頁。

(44) 「詩人たちの中では正にクロプシュトックがシラーの心を最も満足させた。」とあって後、シラーの内心の声が「偉大なる自然探究者ハラーは、同時にまた偉大なる詩人ではないか?」と呼びかけたと、シュトライヒャー著『シラーのシュトゥットガルト逃亡とマンハイム滞在(一七八二年―八五年)』(レクラム文庫、一九六八年)一九頁にあり、ヘルダーリン全集の第一巻所収の詩「わが決意」(一七八七年)には、「ピンダロスの雄飛」(第十一句)と並び「クロプシュトックの偉容」(第十二句)が理想とされている(二八頁)。

eigenen Genuß an diesen Werken suchte er auch seiner ältesten Schwester wenigstens in dem Maße zu verschaffen, als es durch briefliche Mitteilung in Erklärung der schönsten und schwersten Stellen möglich war. In seiner jugendlichen Unschuld, den hohen Stand noch gar nicht ahnend, zu dem ihn die Vorsehung erwählt und mit all ihren göttlichen Gaben so überschwenglich reich beteiligt hatte, konnte er wohl öfters die entschiedene Neigung für dichterische oder andere Geisteswerke als eine bloße Belustigung für seine Phantasie betrachten und sich Vorwürfe darüber machen, wenn dadurch so manche Stunde seinem Berufsstudium entzogen wurde. Aber eine innere, beruhigende Stimme rief ihm dann zu: ist der große Arzt, der große Naturforscher Haller nicht auch zugleich ein großer Dichter? Wer besang die Wunder der Schöpfung schöner und herrlicher als Haller?

Du hast den Elefant aus Erden aufgetürmet,

Und seinen Knochenberg beseelt,

war ein Ausdruck, den Schiller nebst so vielen andern dieses Dichters nicht nur damals, sondern auch dann noch mit Bewunderung anführte, als seine erste Jugendzeit längst verfliegen war.

Vgl. Hölderlin „Mein Vorsatz“ (1787) Str.3. V.11-12: StA. Bd.1. S.28.

Ists schwacher Schwung nach Pindars Flug? ists

Kämpfendes Streben nach Klopstocksgröße?

Vgl. Hölderlin „Am Tage der Freundschaftsfeier“ (1788) Str.6. V.50-53: StA. Bd.1. S.59.

Und meine Laren –

Den Schatten meiner Stella,

Und Klopstocks Bild und Wielands, –

Mit Blumen umhängt zu sehen.

50

Manuscriptum receptum 1. 9. 1997

Editnm pronuntiatum 25. 12. 1997

as yet the first four books only: and as to my opinion (the reasons of which hereafter) you may guess it from what I could not help muttering to myself, when the good pastor this morning told me, that Klopstock was the German Milton — „a very *German* Milton indeed!!!“ ...

43) Herder „Gefundene Blätter aus den neuesten Deutschen Litteraturannalen von 1773“ I: Sämtliche Werke (1877-1913) in 33 Bänden. Faksimile-Nachdruck. Berlin/Hildesheim (Weidmann/Olms) 1967-1968. Bd.5. S.258-259.

— und so erschien endlich in dem Jahre der Meßias ganz. Allerdings ein Monument der Deutschen Poesie und Sprache. Voll der unmittelbarsten Empfindung und einer Einbildung, die sich oft der Inspiration nähert. Malerei und Äußerung der Seele, wie sie sich in den geheimsten, verwickeltesten Gefühlen nur ausreden, in Worte (S.258/S.259) ausgießen läßt, und was dem Werk gewiß nicht zur letzten Ehre gereicht, voll Religion und Gesang. Wo sich immer nur die Menschliche Seele aufschwingen ließ, wird Gesang; Gesang wie Nachhall seliger Geister aus einem Thale der Unschuld und Liebe. Fast hört die Sprache auf, was sie ist, Sprache, und was sie nach einigen seyn soll, harte Deutsche Sprache zu seyn, wird Ton! und Anklang goldner Saite. Da es Religion ist, was sie tönet: und von hier aus der Gesang Alles umfaßt, was nur der leiseste Lispel des Gefühls auf Erd und Himmel, Vergangenheit und fernster Zukunft faßen konnte —

Vgl. Herder „Von Deutscher Art und Kunst“(1773) I. Auszug aus einem Briefwechsel über Oßian und die Lieder alter Völker: Sämtliche Werke. Bd.5. S.184-185.

Im ersten Falle haben Milton, Haller, Kleist und andre gedichtet: sie sannen lang, ohne zu schreiben: sprachen sie aber, so wards und stand. ... Haller, dessen Gedichten mans gnug ansieht, wie ausgedacht und zusammendrängend sie sind: Leßing ist, glaub'ich, in seinen spätern Stücken der Dichtkunst auch in dieser Zahl — ... Sie dauren, und die Seele findet bei jedem neuen wiederholten Eindruck gleichsam noch etwas Tiefers und Vollendetes, was sie anfangs nicht bemerkte. Von der (S.184/185) zweiten Art muß z.E. Klopstock in den auströmendsten Stellen seiner Gedichte seyn: Gleim, dessen Gedichte so viel Sichtbares vom Ersten Wurf haben: Jacobi, dessen Verse Nichts, als sanfte Unterhaltungen des Moments werden, ... Ramler, glaube ich, sucht beide Arten zu verbinden, ob freilich gleich die Erste, die ausgedachte, bei ihm ungleich sichtbarer ist. Wieland sucht sie zu verbinden, ob er gleich immer doch mehr aus dem Fach der Weltkänntniß seines Herzens zu schreiben scheint, ...

— und überhaupt verbindet sie in gewißem Maasse jeder glückliche Kopf: denn so entfernt beide Arten im Anfange scheinen; so wenig Ein Genie sich der Art des Andern aus dem Stegreife bemächtigen kann: so kommen sie doch endlich beide überein; lange und stark und lebendig gedacht, oder schnell und würksam empfunden — im Punkt der Thätigkeit wird beides impromptu, oder bekömmt die Vestigkeit, Wahrheit, Lebhaftigkeit und Sicherheit desselben, und das — nur das ist, was ich sagen wollte. ...

44) Streicher, Andreas(1761-1833) „Schillers Flucht von Stuttgart und Aufenthalt in Mannheim von 1782 bis 1785“(1828:1782-1783/1830:1783-1785) Nach der ersten Ausgabe von 1836. Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1968. S.19. Vgl. Schiller, Freidrich(1759-1805).

Unter den Dichtern war es Klopstock, der sein Gefühl, das noch immer am liebsten bei den ernstern, erhabenen Gegenständen der Religion verweilte, am meisten befriedigte. Seinen

welche durch die Eigenheit ihres Studiums vor allen andern Menschen vorzüglich begünstigt zu sein scheinen. ...

41) Lessing, Gotthold Ephraim (1729-1781) „Das Neueste aus dem Reiche des Witzes“ (1751) ‚Monat Mai 1751‘: Werke. 25 Teile. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 1925/1929/1935. Reprografischer Nachdruck. Hildesheim (Olms) 1970. Teil 8. S.35/S.39f. Vgl. „Briefe“ (1753): Teil 8. S.147f. (Br.18).

Endlich hat die Welt den ersten Band des „Messias“ erhalten, worinne zu den drei bekannten Gesängen der vierte und fünfte gekommen sind. ... Jeder Satz ist eine Schilderung, und jedes Wort ein Bild. Betrachtet sie stückweise. Eine Schönheit wird die andre hervorbringen, und jede bleibt groß genug, unzählige, anfangs unbemerkte, in sich zu enthalten. wann ihr mit der Zergliederung fortfahret. ... Die Versart, welche der Dichter gewählt hat, ist eine horazische, voller majestätischen Wohlklangs und ungemein geschickt, die Gedanken so rund zu machen als möglich. Die drei ersten Zeilen sind asklepiadeisch, und die vierte ist glykonisch. Überall ist der Wert der Silben und der Abschnitt genau beobachtet worden, welches man um so viel mehr bewundern muß, je ungewohnter bisher die deutsche Sprache der römischen Fesseln gewesen ist. ... (S.35//S.39) ... Wann der Verfasser des „Messias“ kein Dichter ist, so ist er doch ein Verteidiger unserer Religion. ... Zu einer Zeit, da man das Christentum nur durch Spöttereien bestreitet, werden ernsthafte Schlüsse übel verschwendet. ... Sucht man die Religion verächtlich zu machen, so suche man auf der andern Seite, sie in alle dem Glanze vorzustellen, wo sie unsre Ehrfurcht verdienet. Dieses hat der Dichter getan. Das erhabenste Geheimnis weiß er auf einer Seite zu schildern, wo man gern seine Unbegreiflichkeit vergißt und sich in der Bewunderung verlieret. Er weiß in seinen Lesern den Wunsch zu erwecken, daß das Christentum wahr sein möchte; gesetzt auch, wir wären so unglücklich, daß es nicht wahr sei. ... Wann die Arznei heilsam ist, so ist es gleichviel, wie man sie dem Kinde beibringt. ... Diese einzige Betrachtung sollte den „Messias“ schätzbar machen und diejenigen behutsamer, welche von der Natur verwahrloset sind oder sich selbst verwahrloset haben, daß sie die poetischen Schönheiten desselben nicht (S.39/S.40) empfinden. ... (S.40//S.147) ... Dieser Anmerkung ungeachtet unterstand ich mich zu behaupten, daß, wenn der Verfasser des Messias auch kein Dichter wäre, er doch ein Verteidiger unsrer Religion sein würde, ... Zu einer Zeit, da man das Christentum nur durch Spöttereien bestreitet, werden ernsthafte Schlüsse übel verschwendet. ... Sucht man die Religion verächtlich zu machen, so suche man auf der andern Seite, sie in alle dem Glanze vorzustellen, in welchem sie unsre Ehrfurcht verdienet. Dieses hat der Dichter getan. Das erhabenste Geheimnis weiß er auf einer Seite (S.147/S.148) zu schildern, wo man gern seine Unbegreiflichkeit vergißt und sich in der Bewunderung verlieret. Er weiß in seinen Lesern den Wunsch zu erwecken, daß das Christentum wahr sein möchte, gesetzt auch, wir wären so unglücklich, daß es nicht wahr sei. ... Wann die Arznei heilsam ist, so ist es gleich viel, wie man sie dem Kinde beibringt. -- Diese einzige Betrachtung sollte den Messias schätzbar machen und diejenigen behutsamer, welche von der Natur verwahrloset sind oder sich selbst verwahrloset haben, daß sie die poetische Schönheiten desselben nicht empfinden. ...

42) Coleridge „Biographia Literaria“ Vol.2. S.180: „Satyrane's Letters“ III.

Lastly, if you ask me, whether I have read the Messiah, and what I think of it? I answer --

/ Bebt auf der Lippe, / Schimmert im Auge, / Träufelt, wie Thau, / Hinab in deines Gesanges heiligen Strom! / ... (Stolberg, Fr.L. „Homer“ Str.1. V.1-6)

39) Diderot, Denis (1713-1784) „Sur les Femmes“ (1772): Œuvres. Paris (Gallimard) 1951. S.949. Les femmes étonnent, belles comme les séraphins de Klopstock, terribles comme les diables de Milton.

40) Coleridge „Biographia Literaria“ Vol.2. Worthworth's notes(S.175ff.) S.179.

The same day I dined at Mr. Klopstock's, where I had the pleasure of a third interview with the poet. We talked principally about indifferent things. I asked him what he thought of Kant. He said that his reputation was much on the decline in Germany. That for his own part he was not surprised to find it so, as the works of Kant were to him utterly incomprehensible — that he had often been pestered by the Kantians, but was rarely in the practice of arguing with them. ... He spoke of Wolf as the first Metaphysician they had in Germany. Wolf had followers; but they could hardly be called a sect, and luckily till the appearance of Kant, about fifteen years ago, Germany had not been pestered by any sect of philosophers whatsoever; but that each man had separately pursued his enquiries uncontrolled by the dogmas of a Master. Kant had appeared ambitious to be the founder of a sect; that he had succeeded: but that the Germans were now coming to their senses again. ... He seemed pleased to hear, that as yet Kant's doctrines had not met with many admirers in England — did not doubt but that we had too much wisdom to be duped by a writer who set at defiance the common sense and common understandings of men. ... („Satyrane's Letters“ 1809: Vol.2. S.132-180)

Vgl. „Biographia Literaria“(1817)((1)13). Kap.9. S.99(Vol.1).

The writings of the illustrious sage of Königsberg, the founder of the Critical Philosophy, more than any other work, at once invigorated and disciplined my understanding. The originality, the depth, and the compression of the thoughts; the novelty and subtlety, yet solidity and importance of the distinctions; the adamant chain of the logic; and I will venture to add (paradox as it will appear to those who have taken their notion of IMMANUEL KANT from Reviewers and Frenchmen) the *clearness* and *evidence*, of the “CRITIQUE OF THE PURE REASON;” of the “JUDGEMENT;” of the “METAPHYSICAL ELEMENTS OF NATURAL PHILOSOPHY;” and of his “RELIGION WITHIN THE BOUNDS OF PURE REASON;” took possession of me as with a giant's hand. After fifteen years' familiarity with them, I still read these and all his other productions with undiminished delight and increasing admiration. ...

Vgl. Hölderlin. Brief 172 an den Bruder vom 1.1.1799: StA. Bd.6. S.304.

Kant ist der Moses unserer Nation, der sie aus der ägyptischen Erschlaffung in die freie einsame Wüste seiner Speculation führt, und der das energische Gesetz vom heiligen Berge bringt. ...

Vgl. Goethe „Winckelmann“(1805): HA. Bd.12. S.119-120.

Doch steht, indem uns die Ereignisse der neuern Zeit vorschweben, eine Bemerkung hier wohl am rechten Platze, (S.119/S.120) die wir auf unserm Lebenswege machen können, daß kein Gelehrter ungestraft jene große philosophische Bewegung, die durch Kant begonnen, von sich abgewiesen, sich ihr widersetzt, sie verachtet habe, außer etwa die echten Altertumsforscher,

„Poétique du christianisme“. Livre I. Chapitre IV „De quelques poèmes français et étrangers“ : „Essai sur les révolutions/Génie du christianisme“ (Bibliothèque de la Pléiade. Chateaubriand. Tome 2) Paris (Gallimard) 1978. S.640-641.

Klopstock est tombé dans le défaut d'avoir pris le *merveilleux* du christianisme pour *sujet* de son poème. Son premier personnage est un Dieu; cela seul suffirait pour détruire l'intérêt tragique. Toutefois il y a de beaux traits dans le *Messie*. Les deux amants ressuscités (S.640 /S.641) par le Christ offrent un épisode charmant que n'auraient pu fournir les fables mythologiques. Nous ne nous rappelons point de personnages arrachés au tombeau, chez les anciens, si ce n'est Alceste, Hippolyte et Er de Pamphylie. L'abondance et la grandeur caractérisent le merveilleux du *Messie*. Ces globes habités par des êtres différents de l'homme, cette profusion d'anges, d'esprits de ténèbres, d'âmes à naître, ou d'âmes qui ont déjà passé sur la terre, jettent l'esprit dans l'immensité. Le caractère d'Abbadona, l'ange repentant, est une conception heureuse. Klopstock a aussi créé une sorte de séraphins mystiques inconnus avant lui. ...

Vgl. „Génie du christianisme“ II^e Partie. Livre IV. Chapitre X „Machines poétiques. — Vénus dans les bois de Carthage, (Vergilius „Aeneis“ I.314ff.) Raphaël au berceau d'Éden (Milton „Paradise Lost“ 5.277ff.)“ : Bibliothèque de la Pléiade. Chateaubriand. Tome 2. S.742.

Ici Milton, presque aussi gracieux que Virgile, l'emporte sur lui par la sainteté et la grandeur. Raphaël est plus beau que Vénus, Éden plus enchanté que les bois de Carthage, et Énée est un froid et triste personnage auprès du majestueux Adam. Voici un ange mystique de Klopstock:

..... *Dann eilet der Thronen* ... („Der Messias“ I.289ff.)

«Soudain le premier né des Trônes descend vers Gabriel, pour le conduire vers le Très-Haut. L'Éternel le nomme *Élu*, et le ciel *Eloa*. Plus parfait que tous les êtres créés, il occupe la première place près de l'Être infini. Une de ses pensées est belle comme l'âme entière de l'homme, lorsque, digne de son immortalité, elle médite profondément. Son regard est plus beau que le matin d'un printemps, plus doux que la clarté des étoiles, lorsque, brillantes de jeunesse, elles se balancèrent près du trône céleste avec tous leurs flots de lumière. Dieu le créa le premier. Il puisa dans une gloire céleste son corps aérien. Lorsqu'il naquit, tout un ciel de nuages flottait autour de lui; Dieu lui-même le souleva dans ses bras, et lui dit en le bénissant: *Créature, me voici.*»

Raphaël est l'ange *extérieur*; Éloa l'ange *intérieur*: les Mercure et les Apollon de la mythologie nous semblent moins divins que ces Génies du christianisme.

38) Stolberg, Friedrich Leopold (1750-1819) „Homer's Ilias“ (1778): Stolberg, Christian/Fr.L. „Gesammelte Werke“ (1820-1825) 20 Bde. Hamburg (Perthes und Besser) 1820-1825. Faksimile-Nachdruck. Hildesheim (Olms) 1974. Bd.11-12. Bd.11. S.IV/S.V.

Aber nicht Ihnen ist diese Bewunderung fremd; sie ist Ihr eignes Gefühl, und Sie können sich von diesem Gefühle Rechenschaft geben; weil Sie wissen, daß alle edlen Empfindungen, von der heroischen Kühnheit des Tyrannenmörders an, bis zur sorgsam Zärtlichkeit der Mutter, die eine Fliege von ihrem schlummernden Säuglinge wegscheucht, ein großes Ganze ausmachen, ein harmonisches Ganze, wie mit ihren sanften und starken Saiten die Leier des Apollon. (S.IV/S.V) H o m e r. Heil dir, Homer! / Freudiger, entflammter, weinender Dank

Dampf und Nebel, auf daß ich Dinge sehen und beschreiben möge, die in sterblichen Augen unsichtbar sind. ... (Das dritte Buch. V.51-55)

35) Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: NA. Bd.20. S.435//S.455((1)29)/S.456/S.457/S.458.

... Aber von allem diesem keine Spur im Homer; als ob er etwas alltägliches berichtet hätte, ja als ob er selbst kein Herz im Busen trüge, fährt er in seiner trockenen Wahrhaftigkeit fort: „Doch den Glaukus erregete Zevs, daß er ohne Besinnung ...“ ... Ilias. Voßische Uebersetzung. I.Band. Seite 153. (S.435//S.455:(1)29) Klopstock ... von diesem musikalischen Dichter ... (S.455/S.456) ... So eine herrliche Schöpfung die Messiadie in musikalisch poetischer Rücksicht, nach der oben gegebenen Bestimmung, ist, so vieles läßt sie in plastisch poetischer noch zu wünschen übrig, wo man bestimmte und für die Anschauung bestimmte Formen erwartet. ... bildend (plastisch) oder musikalisch ... in diesem Sinne nenne ich Klopstock vorzugsweise einen musikalischen Dichter. (S.456/S.457) ... Seine Sphäre ist immer das Ideenreich, und ins Unendliche weiß er alles, was er bearbeitet, hinüberhören. Man möchte sagen, er ziehe allem, was er behandelt, den Körper aus, um es zu Geist zu machen, so wie andere Dichter alles geistige mit einem Körper bekleiden. Beynahe jeder Genuß, den seine Dichtungen gewähren, muß durch eine Übung der Denkkraft errungen werden; alle Gefühle, die er, und zwar so innig und so mächtig in uns zu erregen weiß, strömen aus übersinnlichen Quellen hervor. ... Keusch, überirdisch, unkörperlich, heilig wie seine Religion ist seine dichterische Muse, und man muß mit Bewunderung gestehen, daß er, wiewohl zuweilen in diesen Höhen verirret, doch niemals davon herabgesunken ist. ... Nur in gewissen exaltirten Stimmungen des Gemüths kann er gesucht und empfunden werden; deswegen ist er auch der Abgott der Jugend, obgleich bey weitem nicht ihre glücklichste Wahl. Die Jugend, die immer über das Leben hinausstrebt, die alle Form fliehet, und jede Grenze zu enge findet, ergeht sich mit Liebe und Lust (S.457/S.458) in den endlosen Räumen, die ihr von diesem Dichter aufgethan werden. Wenn dann der Jüngling Mann wird, und aus dem Reiche der Ideen in die Grenzen der Erfahrung zurückkehrt, so verliert sich vieles, sehr vieles von jener enthusiastischen Liebe, aber nichts von der Achtung, die man einer so einzigen Erscheinung, einem so außerordentlichen Genius, einem so sehr veredelten Gefühl, die der Deutsche besonders einem so hohen Verdienste schuldig ist.

36) Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 2.Teil. 1812. 10.Buch: HA. Bd.9. S.398.

Nun sollte aber die Zeit kommen, wo das Dichtergenie sich selbst gewahr würde, sich seine eignen Verhältnisse selbst schüfe und den Grund zu einer unabhängigen Würde zu legen verstünde. Alles traf in Klopstock zusammen, um eine solche Epoche zu begründen. Er war, von der sinnlichen wie von der sittlichen Seite betrachtet, ein reiner Jüngling. Ernst und gründlich erzogen, legt er, von Jugend an, einen großen Wert auf sich selbst und auf alles, was er tut, und indem er die Schritte seines Lebens bedächtig vorausmißt, wendet er sich, im Vorgefühl der ganzen Kraft seines Innern, gegen den höchsten denkbaren Gegenstand. Der Messias, ein Name, der unendliche Eigenschaften bezeichnet, sollte durch ihn aufs neue verherrlicht werden. Der Erlöser sollte der Held sein, den er, durch irdische Gemeinheit und Leiden, zu den höchsten himmlischen Triumphen zu begleiten gedachte. ...

37) Chateaubriand, François René (1768-1848) „Génie du christianisme“ (1802) Seconde Partie

… Keinem Vernünftigen kann es einfallen, in demjenigen, worinn Homer groß ist, irgend einen Neuern ihm an die Seite stellen zu wollen, und es klingt lächerlich genug, wenn man einen Milton oder Klopstock mit dem Nahmen eines neuern Homer beehrt sieht. Eben so wenig aber wird irgend ein alter Dichter und am wenigsten Homer in demjenigen, was den modernen Dichter charakteristisch auszeichnet, die Verglei- (S.439/S.440) chung mit demselben aushalten können. Jener, möchte ich es ausdrücken, ist mächtig durch die Kunst der Begrenzung; dieser ist es durch die Kunst des Unendlichen. …

32) **Novalis**(1772-1801) „Die Lehrlinge zu Sais“(1798-1799) Kap.2: Schriften. 4 Bde. Leipzig (Bibliographisches Institut) 1929. Bd.1. S.26-27.

Sein Herz klopfte in unendlicher Sehnsucht, und die süßeste Bangigkeit durchdrang ihn (S.26 /S.27) in dieser Behausung der ewigen Jahreszeiten.

33) **Luther, Martin**(1483-1546) „Dictata super Psalterium. 1513-1516“: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Weimarer Ausgabe. Bd.3/Bd.4. 1885/1886. Unveränderter Abdruck. Weimar 1966. Bd.4. S.356. Psalmus 119. 105. Scholia.

Nam oculos oportet captivari in obsequium Christi et solo verbo duci, quod auribus percipitur, oculis non videtur. … Et tamen est lucerna, quia pedes dirigit et affectum, non intellectum requirit fides. …

34) **Milton** „Paradise Lost“(1) III. 1-8/18-22(1)4). S.60/S.61.

Hail holy Light, offspring of Heav'n first-born,

Or of th' Eternal Coeternal beam

May I express thee unblam'd? since God is Light,

And never but in unapproached Light

Dwelt from Eternity, dwelt then in thee,

Bright effluence of bright essence increate.

Or hear'st thou rather pure Ethereal stream,

Whose Fountain who shall tell? …

S.60

5

Vgl. **Bodmer**. Übersetzung vom Miltonschen „Verlohrnen Paradiese“(1)4). S.104/S.105(1)4). Das dritte Buch. Anfang.

SEy begrüßt heiliges Licht, du erstgebohrnes Kind des Himmels, gleichwie mit dem ewigen Strahl; darf ich deinen Nahmen ungestraft in den Mund nehmen? Sintemahl Gott Licht ist, und von Ewigkeit in einem Lichte, dem niemand nahe kömmt, wohnt, und hiemit in dir wohnt, heller Ausfluß eines hellen unerschaffenen Wesens. Oder hörest du dich lieber einen lautern etherischen Strohm heissen, dessen Quelle nicht auszufinden ist? (S.104/)

Vgl. **Milton** „Paradise Lost“ III. 51-55. S.62.

So much the rather thou Celestial Light

Shine inward, and the mind through all her powers

Irradiate, there plant eyes, all mist from thence

Purge and disperse, that I may see and tell

Of things invisible to mortal sight. 55

Vgl. **Bodmer**. Übersetzung vom Miltonschen „Verlohrnen Paradiese“ S.106-107.

… Um so viel heller bestrale du mich inwendig himmlisches Licht, und erleuchte meine Seele in allen ihren Arten Vermögens, pflanze Augen darinnen, säubere sie (S.106/S.107) von allem

there was not enough of action in it; but that Lessing was the most chaste of their writers. He spoke favourably of Goethe; but said that his 'Sorrows of Werter' was his best work, better than any of his dramas: he preferred the first written to the rest of Goethe's dramas. Schiller's 'Robbers' he found so extravagant, that he could not read it. I spoke of the scene of the setting sun. He did not know it. He said Schiller could not live. He thought Don Carlos the (S.176/S.177) best of his dramas; but said that the plot was inextricable. — It was evident he knew little of Schiller's works: indeed, he said, he could not read them. Bürger, he said, was a true poet, and would live; that Schiller, on the contrary, must soon be forgotten; that he gave himself up to the imitation of Shakespeare, who often was extravagant, but that Schiller was ten thousand times more so. He spoke very slightly of Kotzebue, as an immoral author in the first place, and next, as deficient in power. ... He said Wieland was a charming author, and a sovereign master of his own language: that in this respect Goethe could not be compared to him, nor indeed could any body else. He said that his fault was to be fertile to exuberance. ... He spoke in raptures of Wieland's style, and pointed out the passage where Retzia is delivered of her child, as exquisitely beautiful. ... (S.177/S.178) ... He knew little or nothing of Gray, except his Elegy in the Churchyard.

29) Goethe, J.W. (1749-1832) „Die Leiden des jungen Werther“(1774): Werke. Hamburger Ausgabe (=HA). München (Beck/dtv) 1981/1982. Bd.6. S.27.

... Wir traten ans Fenster. Es donnerte abseitwärts, und der herrliche Regen säuselte auf das Land, und der erquickendste Wohlgeruch stieg in aller Fülle einer warmen Luft zu uns auf. ... ich sah ihr Auge tränenvoll, sie legte ihre Hand auf die meinige und sagte: „Klopstock!“

— Ich erinnerte mich sogleich der herrlichen Ode, die ihr in Gedanken lag, und versank in dem Strome von Empfindungen, den sie in dieser Losung über mich ausgoß. ... Edler! hättest du deine Vergötterung in diesem Blicke gesehen, und möcht' ich nun deinen so oft entweihten Namen nie wieder nennen hören! („Die Leiden des jungen Werther“ Erstes Buch. 16.6.1771). Vgl. Schiller, Fr. (1759-1805) „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96): Werke. Nationalausgabe (=NA). Bd.20. Weimar 1962. S.436/S.455.

Der Dichter, sagte ich, ist entweder Natur, oder er wird sie suchen. Jenes macht den naiven, dieses den sentimentalischen Dichter. ... (S.436/S.455) ... In der sentimentalischen Gattung und besonders in dem elegischen Theil derselben möchten wenige aus den neuern und noch wenigere aus den ältern Dichtern mit unserm Klopstock zu vergleichen seyn. Was nur immer, außerhalb den Grenzen lebendiger Form und außer dem Gebiete der Individualität, im Felde der Idealität zu erreichen ist, ist von diesem musikalischen Dichter geleistet*). ...

*) Ich sage musikalischen, um hier an die doppelte Verwandtschaft der Poesie mit der Tonkunst und mit der bildenden Kunst zu erinnern. ...

30) Klopstock „Von der Sprache der Poesie“(„Der Nordische Aufseher“ 1758): Ausgewählte Werke. München (Hanser) 1962. S.1016-1026. S.1018/S.1024.

Luther ... Opitz ... Haller ... (S.1018//S.1024) ... Sie gehen auf dem Wege fort, den Luther, Opitz und Haller (ich nenne diese großen Männer nicht ohne Ursache noch einmal) zuerst betreten haben. ...

31) Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96): NA. Bd.20. S.439-440.

1: 8 Bl. 240 S., Teil 2: 240 S. ...

Ausgabe B (1742): Johann Miltons | Episches | Gedichte | von dem | Verlohrnen | Paradiese. | Uebersetzt und durchgehends mit Anmerkungen | Über die Kunst des Poeten begleitet | von | Johann Jacob Bodmer. | Zürich, bey Conrad Orell und (S.25/S.26) Comp. 1742. | und Leipzig bey Joh. Friederich Gleditsch. 8° , I Bl., 576 S. ...

Ausgabe C (1754): Johann Miltons | verlohnes Paradies. | ...

Ausgabe D (1759): J.M. | verlohnes | Paradies. | ... (S.26/S.27) ...

Ausgabe E (1769): Johann Miltons | verlohnes | Paradies. | ...

Ausgabe F (1780): Johann Miltons | verlohnes | Paradies. | ...

26) Klopstock „Brief an Bodmer vom 10.8.1748“(HKA. Abt. Briefe I: (1)1) S. 205(Anmerkungen vom Herausgeber) über „Miltonus“((1)1).

Bodmers Prosaübersetzung war in der ersten Fassung 1732 erschienen; doch scheint Klopstock zunächst eine andere Übersetzung kennengelernt zu haben(vgl. Cramer, Klopstock, Th.1, S.37; Muncker, Klopstock, S.37), die ihm noch keinen Zugang zu dem englischen Dichter ermöglichte. Die Begeisterung, mit der Klopstock Milton in der Pförtner Abschiedsrede rühmt, ist sicherlich schon Bodmers Einfluß zuzuschreiben(vgl. Cramer, Klopstock, Th.1, S.71).

27) Bodmer. Übersetzung vom Miltonschen „Verlohrnen Paradiese“((1)4) Nachwort((1)25). S.27. [Berge, Ernst Gottlieb ...:] Das Verlostigte Paradeiß Auß JOHANN MILTONS Zeit seiner Blindheit In Englischer Sprache abgefaßten unvergleichlichen Gedicht In Unser gemein Teutsch übertragen und verlegt Durch E.G. ... B. In ZERBST Bey Johann Ernst Bezeln. ANNO M DC LXXXII. (1682)

28) Coleridge „Biographia Literaria“ Vol.2. S.169-171/S.176-178(Wordsworth's notes).

Believe me, I walked with an impression of awe on my spirits, as W — and myself accompanied Mr. Klopstock to the house of his brother, the poet, which stands about a quarter of a mile from the city gate. ... The poet entered. I was much disappointed in his countenance, and recognised in it no likeness to the bust. There was no comprehension in the forehead, no weight over the eye-brows, no expression of peculiarity, moral or intellectual, on the eyes, no massiveness in the general countenance. ... we were both equally impressed with his liveliness, and his kind and ready courtesy. He talked in French with my friend, and with difficulty spoke a few sentences to me in English. ... (S.169/S.170) ... The subject changed to literature, and I inquired in Latin concerning the history of German poetry and the elder German poets. To my great astonishment he confessed that he knew very little on the subject. He had indeed occasionally read one or two of their elder writers, but not so as to enable him to speak of their merits. ... (S.170/S.171) ... He appeared to know very little of Milton — or indeed of our poets in general. ((1)22) ... I looked at him with much emotion — I considered him as the venerable father of German poetry; ... (S.171//Wordsworth's notes : S.176) ... He values himself upon the plan of his odes, and accuses the modern lyrical writers of gross deficiency in this respect. ... I spoke of Dryden's St. Cecilia; but he did not seem familiar with our writers. ... He thought that Voss in his translation of the Iliad had done violence to the idiom of the Germans, and had sacrificed it to the Greeks, not remembering sufficiently that each language has its particular spirit and genius. He said Lessing was the first of their dramatic writers. I complained of Nathan as tedious. He said

Breitinger hatte er überhaupt auf der Pforte eifrig gelesen; seine Auslassungen über das Wesen des Epos fußen auf jene Schriften. Virgil liebt er noch mehr als Homer; später wird dies anders; da sind ihm nur die Griechen mustergültig. ... (S.38//S.141) ... Der Plan und Entwurf zum Messias erstand, wenn anders wir dem Gedächtnis des Greises trauen dürfen, schon um sein fünfzehntes oder sechzehntes Lebensjahr. Am 13. November 1799 nämlich schreibt Klopstock an Herder: „Es sind beinahe 60 Jahre, daß ich diesen Entwurf zu machen anfang.“ Am 6. November 1739 aber bezog der junge Klopstock die Schulpforte. Er müßte also nicht lange nach seinem Eintritt in die Pforte auf den Messiasgedanken sein. Unmöglich ist das nicht; jedenfalls aber ist die intensivere Beschäftigung mit seinem Plane in die beiden letzten Jahre (Schola Portensis 1739-1745: 15-22 Jahre alt) seines Aufenthaltes auf seiner Schule zu setzen, also auch der Traum, den er von der Eva gehabt. Er schrieb am 20. März 1800 an den damaligen Rektor der Pforte: „Die Erinnerung, auf der Pforte gewesen zu sein, macht mir auch deswegen nicht selten Vergnügen, weil ich dort den Plan zu dem Messias beinah ganz vollendet habe. ...“ ... Man kann dem Dichter seine später gegen Cramer, den Sohn seines Universitätsfreundes, Johann Andreas, gethane Bemerkung, die Idee zum Messias sei in ihm entstanden, ehe er etwas von Milton selbst gelesen, wohl glauben, soweit es sich eben um den bloßen Gedanken, den Messias zum Vorwurf eines Epos zu nehmen, handelt. Seine Unbekanntschaft mit dem Sänger des Verlorenen und Wiedergewonnenen Paradieses konnte jedoch nicht mehr lange dauern; zuerst sah er ihn, nach Cramers Bericht, eines Nachmittags auf dem Zimmer eines Schulkameraden liegen; beim Aufschlagen stieß er auf die unschöne Allegorie von der Sünde und dem Tode (am Schlusse des zweiten Gesanges); dies reizte ihn wenig, weiter zu lesen; er machte das Buch sogleich wieder zu. Doch mußte er durch Bodmers Übersetzungsversuche und durch die von ebendiesem übertragene Anhandlung Addisons „Über die Schreibart in Miltons V. P.“ über den Inhalt des englischen Gedichtes nicht im (S.141/S.142) Ungewissen geblieben sein. Wahrscheinlich über hat er das Verlorene Paradies recht eifrig gelesen: denn wie wäre es sonst erklärlich, daß er bei seinem Abgang von der Fürstenschule, am 21. September 1745, so begeisterte Worte in seiner lateinischen Abschiedsrede Milton widmen konnte? Rief er doch aus: „Du aber, geheiligter Schatten des Miltons! in welchem Kreise des Himmels du dich jetzo freust, und was in deinen Liedern der Ohren der Engel wert ist, diesen dir jetzt verwandteren Geschöpfen vorsingst, vernimm es, wenn ich etwas Deiner Würdiges gesagt habe, und zürne nicht über meine Kühnheit, die nicht allein dir zu folgen, sondern sich auch an einen noch größeren und herrlicheren Stoff zu wagen gedenkt.“ ... (S.142)

24) Coleridge „Biographia Literaria“ Vol.2. S.170 („Satyrane's Letters“ III).

This was accidentally confirmed to me by an old German gentleman at Helmstadt, who had been Klopstock's school and bed-fellow. Among other boyish anecdotes, he related that the young poet set a particular value on a translation of the Paradise Lost, and always slept with it under his pillow.

25) Bodmer. Übersetzung vom Miltonschen „Verlohrnen Paradiese“ ((1)4). Nachwort von Bender, Wolfgang. S.25-27 über Bodmers Milton-Übertragung.

Ausgabe A (1732): Johann Miltons | Verlust | des | Paradieses. | Ein | Helden-Gedicht.
| In ungebundener Rede übersetzt. | Zürich, | Gedruckt bey Marcus Rordorf, 1732. ... Teil

Und meine Laren —

Den Schatten meiner Stella,

Und Klopstocks Bild und Wielands, —

Mit Blumen umhängt zu sehen.

50

21) Blake „When Klopstock England defied“ (ca. 1790-1793) V.1-2: Poems. S.468.

When Klopstock England defied,

Uprose terrible Blake in his pride.

22) Coleridge „Biographia Literaria“ Vol.2. S.170f./S.175(Wordsworth's notes).

… He told us that he had read Milton, in a prose translation, when he was fourteen. I understood him thus myself, and W — (S.170/S.171) interpreted Klopstock's French as I had already construed it. He appeared to know very little of Milton — or indeed of our poets in general. He spoke with great indignation of the English prose translation of his Messiah. … he then said to me in English, “I wish you would render into English some select passages of the Messiah, and *revenge* me of your countryman!” It was the liveliest thing which he produced in the whole conversation. He told us, that his first ode was fifty years older than his last. I looked at him with much emotion — I considered him as the venerable father of German poetry; as a good man; as a Christian; seventy-four years old; … (S.171//Wordsworth' notes:S.175) … I remembered to have read there some specimens of a blank verse translation of the Messiah. … On adverting to his own poem, he told me he began the Messiah when he was seventeen: he devoted three entire years to the plan without composing a single line. … The first three cantos he wrote in a species of measured or numerous prose. … He had composed hexameters both Latin and Greek as a school exercise, and there had been also in the German language attempts in that style of versification. These were only of very moderate merit. — One day he was struck with the idea of what could be done in this way — he kept his room a whole day, even went without his dinner, and found that in the evening he had written twenty-three hexameters, versifying a part of what he had before written in prose. From that time, pleased with his efforts, he composed no more in prose. To-day he informed me that he had finished his plan before he read Milton. He was enchanted to see an author who before him had trod the same path. This is a contradiction of what he said before. … („Satyrane's Letters“ 1809. Let.3: „Biographical Sketches“ Ch.22//Ch.23)

23) Klopstock „Der Messias“ (Ges.1-3:Fas.1748 und 1799/Ges.4-20:Fas.1799): Deutsche National-Litteratur (=DNL). Bd.46. Abt.1(Ges.1-7) / Abt.2(Ges.8-20). Stuttgart (Spemann) 1884. Einleitung von Hamel, Richard 1883. S.XXXVIII/S.CXLI-CXLII.

Am 21. September 1745, als der Jüngling bereits in seinem 22. Lebensjahre stand, hielt er jene berühmte Abschiedsrede, in der er umfassende litterarische Kenntnisse, besonders auf dem Gebiete des Epos bekundet. Er kennt die Bibel genau, die epischen Werke der alten und modernen Völker; Homer, Virgil, Tasso, Milton … schildert er mehr oder weniger ausführlich. Milton stellt er über Homer; er hat ihn kennen gelernt, nachdem er schon die Idee zum Messias gefaßt hatte, studierte ihn aber erst nachher, in der Übersetzung Bodmers, die 1732 erschienen und 1742 mit vielen Verbesserungen und einer Anhandlung über die Kunst des Dichters versehen neu herausgekommen war. Die Schriften der Schweizer Bodmer und

... τῆς μὲν Ἰλιάδος γραφομένης ἐν ἀκμῇ πνεύματος ... (183^r/183^v) ... , τῆς δὲ Ὀδυσσεύας τὸ πλέον διηγηματικόν, ὅπερ ἴδιον γήρως. ὄθεν ἐν τῇ Ὀδυσσεύα παρεικάσαι τις ἂν καταδυομένῳ τὸν Ὅμηρον ἤλιϋ, ... οὐ γὰρ ἐτι τοῖς Ἰλιακοῖς ἐκείνοις ποιήμασιν ἴσον ἐνταῦθα σφίξει τὸν τόνον, οὐδ' ἐξωμαλισμένα τὰ ὕψη καὶ ἰζήματα μηδαμοῦ λαμβάνοντα, οὐδὲ τὴν πρόχυσιν ὁμοίαν τῶν ἐπαλλήλων παθῶν, οὐδὲ τὸ ἀγγίστροφον καὶ πολιτικόν καὶ ταῖς ἐκ τῆς ἀληθείας φαντασίαις καταπεπικνωμένον, ... (S.28/S.29) ... (S.28/S.29)

Aus dem gleichen Grund, so denke ich, erfüllte Homer, als er die Ilias im Zenit seiner Dichterkraft schuf, das ganze Werk mit dramatischem Leben und Kämpfen, bringt dagegen in der Odyssee meist nur Erzählung, wie sie das Alter liebt. So möchte man den Homer der Odyssee der sinkenden Sonne vergleichen, deren Glut erlosch, ihre Größe jedoch erhalten blieb. Hier nämlich besitzt er nicht mehr die gleiche Energie wie in jenen Gesängen der Ilias, nicht die immer durchgehaltene, niemals abfallende Höhe, nicht die gleiche Flut sich jagender Leidenschaften, auch nicht die Gewandtheit und rednerische Kraft, die dichte Folge lebenswahrer Bilder, „nein, wie vom Okeanos, der in sich zurücktritt und ringsum die eigenen Grenzen entblößt, sieht man nur mehr die Ebbe seiner Größe und ein Schweifen in Märchen und Wundern. ... (Caput IX. 13: „Du Sublime“ S.15f.)

18) Wieland, Chr. Martin (1733-1813): Sämtliche Werke. Bd.1-39 und Supplemente-Bd.1-4. Leipzig (Götschen) 1794-1811. Faksimile-Ausgabe. Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur. 1984. Bd.1. S.III.

VORBERICHT. ... Seine Laufbahn umfasst also beynahe ein halbes Jahrhundert. Er begann sie, da eben die Morgenröthe unsrer Litteratur vor der aufgehenden Sonne zu schwinden anfangt; und er beschliesst sie — wie es scheint, mit ihrem Untergange. ...

19) Hölderlin. Brief 89 an Neuffer vom Nov. 1794: StA. Bd.6. S.139-140.

... Eine Stelle, die ich heute in dem Vorberichte zu den Wielandschen sämtlichen Werken zufällig ansah, brennt mir noch im Herzen. Es heist da: die Muse Wielands habe mit dem Anfange der deutschen Dichtkunst angefangen, und ende mit ihrem Untergange! allerliebste! Nenne mich einen Kindskopf! aber so was kann mir eine Woche verderben. Seis auch! Wenn's sein mus, so zerbrechen wir unsre unglücklichen Saitenspiele, und thun, was die Künstler träumten! Das ist mein Trost. — Nun auch was von hier. Fichte ist jetzt die Seele von Jena. Und gottlob! daß ers ist. Einen Mann von solcher Tiefe und Energie des Geistes kenn' ich sonst nicht. ... (S.139/S.140) ... Ich hör' ihn alle Tage. Sprech' ihn zuweilen. Auch bei Schiller war ich schon einigemale, das erstemal eben nicht mit Glück. Ich trat hinein, wurde freundlich begrüßt, und bemerkte kaum im Hintergrunde einen Fremden, bei dem keine Miene, auch nachher lange kein Laut etwas besonders ahnden ließ. Schiller nannte mich ihm, nannt' ihn auch mir, aber ich verstand seinen Nahmen nicht. Kalt, fast ohne einen Blick auf ihn begrüßt ich ihn, und war einzig im Innern und Äußern mit Schillern beschäftigt; der Fremde sprach lange kein Wort. ... Der Fremde unterhielt sich über manches mit ihm. Aber ich ahndete nichts. Ich gieng, u. erfuhr an demselben Tage im Klubb der Professoren, was meinst Du? daß Goethe diesen Mittag bei Schiller gewesen sei. Der Himmel helfe mir, mein Unglück, u. ...

20) Hölderlin „Am Tage der Freundschaftsfeier“ (1788) V.50-53: StA. I. S.59.

the name of *essential poetry*. ... Our genuine admiration of a great (S.14/S.15) poet is a continuous *under-current* of feeling; ...

14) Blake „Milton“ Platte(Plate) 41. V.1-5: Poems. S.563.

To bathe in the waters of life; to wash off the not-human
I come in self-annihilation & the grandeur of inspiration,
To cast off rational demonstration by faith in the Saviour;
To cast off the rotten rags of memory by inspiration;
To cast off Bacon, Locke & Newton from Albion's covering;

15) Coleridge „Biographia Literaria“ Vol.I. S.11(Caput I).

Among those with whom I conversed, there were, of course, very many who had formed their taste, and their notions of poetry, from the writings of Mr. Pope and his followers: or to speak more generally, in that school of French poetry, condensed and invigorated by English understanding, which had predominated from the last century. I was not blind to the merits of this school, ... I saw that the excellence of this kind consisted in just and acute observations on men and manners in an artificial state of society, as its matter and substance: and in the logic of wit, conveyed in smooth and strong epigrammatic couplets, as its *form*. Even when the subject was addressed to the fancy, or the intellect, as in the Rape of the Lock, or the Essay on Man; nay, when it was a consecutive narration, as in that astonishing product of matchless talent and ingenuity, Pope's Translation of the Iliad; still a *point* was looked for at the end of each second line, and the whole was as it were a sorites, or, if I may exchange a logical for a grammatical metaphor, a *conjunction disjunctive*, or epigrams. Meantime the matter and diction seemed to me characterized not so much by poetic thoughts, as by thoughts translated into the language of poetry.

16) Longinus „Περὶ ὕψους“ (Vom Erhabenen) Griechisch auf der Textgrundlage: Dionysii vel Longini De sublimitate Libellus. Leipzig (Bibliotheca Teubneriana) 4.Aufl. 1910. Nachdr. Stuttgart 1967 /Deutsch. Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek 8469) 1988. S.82/S.83(Kap.33. 199v).

Ἀρχιλόχου πολλὰ καὶ ἀνοικονόμητα παρασύροντος κάκεινης τῆς ἐκβολῆς τοῦ δαιμονίου ποιητής; ἦν ὑπὸ τάξει δύσκολον, ἄρα δὴ μείζων ποιητής; ... ὁ δὲ Πίνδαρος καὶ ὁ Σοφοκλῆς; ... (S.82/S.83)

Oder wie steht es mit Eratosthenes in der »Erigone«, einem durchwegs untadeligen kleinen Gedicht? Ist nicht Archilochos, der viel Ungestaltetes mit sich führt, ... jener Ausbruch des göttlichen Geistes, den man schwer unter ein Gesetz fügen kann, doch der größere Dichter? Und wolltest du in der Lyrik lieber Bakchylides oder Pindar sein oder in der Tragödie eher Ion von Chios oder doch wohl Sophokles? Denn die einen schreiben fehlerfrei und durchwegs elegant und schön, Pindar jedoch und Sophokles setzen bald durch ihr Dahinstürmen alles in Brand, erlöschen freilich viele Male unerwartet und fallen höchst unglücklich. Oder gäbe einer, der bei Sinnen ist, ein einziges Drama, den Oidipus, für alle gesammelten Werke des Ion her? (Caput XXXIII. 5)

Vgl. „Du Sublime“ (Grec/Français) Paris (Les Belles Lettres) 1939. Troisième Tirage 1965. Collection des Universités de France. S.48: XXXIII. 5.

17) Longinus „Vom Erhabenen“ 183^r/183^v. S.28(Griechisch)/S.29(Deutsch). Kap.9.

- per Moisé, per profeti e per salmi,
 per l'Evangelio e per voi che scrivate
 poi che l'ardente Spirto vi fé almi. 138
- 9) Klopstock „Der Messias“ (DLD 11) S.3: Ges.I. V.8-10.
 Aber, o Werk, das nur GOtt allgegenwärtig erkennet,
 Darf sich die Dichtkunst auch wohl aus dunkler Ferne dir nähern?
 Weihe sie, Geist Schöpfer, vor dem ich im stillen hier bete; 10
- 10) Klopstock „Der Messias“ I-III (DLD 11). S.22: Ges.I. V.566-576.
 O du dieser verherrlichten Erden erwählter Beschützer,
 Seraph Eloa, verzeih dieß deinem zukünftigen Freunde,
 Wenn er deinen seit Edens Erschaffung verborgenen Wohnplatz,
 Von der heiligen Muse gelehrt, den Sterblichen zeigt. 570
 Hat er sich iemals, voll einsamer Wollust, in tiefe Gedanken
 Und in den hellen Bezirk der stillen Entzückung verlohren;
 Hat mit Gedanken der Geister sich sein Gedanke vereinet,
 Und die enthüllete Seele die Rede der Götter vernommen;
 O so hör ihn, Eloa, wenn er, wie die himmlische Jugend,
 Kühn und erhaben, nicht modernde Trümmer der Vorwelt besinget, 575
 Sondern den Bürgern der göttlichen Erde dein Heiligthum aufthut.
- 11) Hölderlin „Brod und Wein“ Str.4. V.55-56: StA. Bd.2. S.91.
 Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle, 55
 Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?
- 12) Blake, William (1757-1827) „Milton“ (1804) „Preface“: Poems. London (Longman) 1971. 3.Aufl.
 1975. S.487-488.
 The stolen and perverted writings of Homer and Ovid, of Plato and Cicero, which all men
 ought to contemn, are set up by artifice against the sublime of the Bible. But when the new
 age is at leisure to pronounce, all will be set right, & these grand works of the more ancient,
 and consciously & professedly inspired men, will hold their proper rank, & the daughters of
 memory shall become the daughters of (S.487/S.488) inspiration. Shakespeare & Milton were
 both curbed by the general malady & infection from the silly Greek & Latin slaves of the
 sword. ... (S.487/S.488) ... believe Christ & his apostles that there is a class of men whose
 whole delight is in destroying. We do not want either Greek or Roman models, if we are but
 just & true to our own imaginations, those worlds of eternity in which we shall live for ever
 — in Jesus our Lord.
- 13) Coleridge, Samuel Taylor (1772-1834) „Biographia Literaria; or Biographical Sketches of my
 Literary Life and Opinions“ (1817) Oxford Univ. Press. 1954. Vol.I. S.13-15 (Caput I).
 In my defence of the lines running into each other, instead of closing at each couplet, and of
 natural language, neither bookish, nor vulgar, neither redolent of (S.13/S.14) the lamp, nor
 of the kennel, such as *I will remember thee*; ... I had continually to adduce the metre and
 diction of the Greek Poets from Homer to Theocritus inclusive; and still more of our elder
 English poets from Chaucer to Milton. ... first, that not the poem which we have *read*, but
 that to which we *return*, with the greatest pleasure, possesses the genuine power, and claims

Melodie, von dem Chaos und der ewigen Nacht gesungen, indem mich eine himmlische Muse aufgemuntert die finstre Reise nach der Tiefe zu wagen, und wieder an das Licht hinaufzusteigen, eine schwere Reise, die noch von wenigen Menschen unternommen worden. Dich besuche ich wieder unversehrt, und fühle deine oberste Lebenslampe, aber du besuchst diese meine Augen nicht mit Lichte, sie bewegen sich vergebens hin und wieder, deine durchbrechenden Strahlen zu suchen, aber sie finden das Tageslicht nicht. Ein weisser Staar hat ihren Augapfel gehemmt, ein trüber Tropfe hat sie überzogen. Dennoch unterlasse ich nicht in die Orte zu gehen, wo die Musen sich an einer klaren Bache, oder in einem schattigten Wald, oder auf einem sonnenreichen Hügel einfinden; die Liebe von heiligen Sachen zu singen hat mein Hertz entzündet, ...

5) Klopstock „Der Messias“ Gesang I-III. Bremen/Leipzig (Saurmann) 1748. Deutsche Litteraturdenkmale des 18. Jahrhunderts (=DLD). Bd.11. Heilbronn 1883. Faksimiledruck. Nendeln/Liechtenstein (Kraus) 1968. S.22(Ges.I. V. 564-573).

O du dieser verherrlichten Erden erwählter Beschützer,
Seraph Eloa, verzeih dieß deinem zukünftigen Freunde, 565
Wenn er deinen seit Edens Erschaffung verborgenen Wohnplatz,
Von der heiligen Muse gelehrt, den Sterblichen zeigt.
Hat er sich jemals, voll einsamer Wollust, in tiefe Gedanken
Und in den hellen Bezirk der stillen Entzückung verlohren;
Hat mit Gedanken der Geister sich sein Gedanke vereinet,
Und die enthüllte Seele die Rede der Götter vernommen;

6) Dante Alighieri (1265-1321) „Divina Commedia“(1319, „La Comedia“ 1472) Venezia 1555. ‚Inferno‘ Canto IV. V.88/V.134: Opere. Testo critico della Società Dantesca Italiana. Firenze. Seconda edizione. 1960. S.457-458.

Quelli è Omero poeta sovrano; („Inferno“ IV.88: S.457)
quivi vid'io Socrate e Platone, („Inferno“ IV.134: S.458)

7) Biblia Germanica 1545. Faksimile-Ausgabe der Luther-Bibel. Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1967/1983. Teil 2. S.249/S.290.

Es begab sich aber / das der Arme starb / vnd ward getragen von den Engeln in Abrahams schos. Der Reiche aber starb auch / vnd ward begraben. („Euangelium Lucas“ 16.22: Teil 2. S.290)

Aber ich sage euch / viel werden komen vom Morgen vnd vom Abend / vnd mit Abraham vnd Isaac vnd Jacob im Himelreich sitzen / („Euangelium Mattheus“ 8.11: Teil 2. S.249)

Vgl. „Euangelium Lucas“ 13. 28-29: Teil 2. S.288.

Da wird sein heulen vnd Zeeklappen / wenn jr sehen werdet / Abraham vnd Isaac vnd Jacob / vnd alle Propheten im reich Gottes / Euch aber hin aus gestossen. (28/29) Und es werden komen vom Morgen vnd vom Abend / von Mitternacht / vnd vom Mittage / die zu tische sitzen werden im reich Gottes /

8) Dante „Divina Commedia“ ‚Paradiso‘ Canto XXIV. V.133-138: Opere. S.765f.

E a tal creder non ho io pur prove
fisice e metafisice, ma dalmi
anche la verità che quinci piove

Wunderbare kan einem richtigen Kopf weder gefallen, noch Ergetzen bringen, wenn es nicht mit dem Wahrscheinlichen künstlich vereinigt, und auf dasselbe gegründet ist. Weil nun in dieser Verbindung des Wunderbaren mit dem Wahrscheinlichen die vornehmste Schönheit und Kraft der Poesie besteht, so würde ich ... (S.133//S.139) ... Folglich muß der Poet das Wahre als wahrscheinlich, und das Wahrscheinliche als wunderbar vorstellen, und hiemit hat das poetische Wahrscheinliche immer die Wahrheit, gleichwie das Wunderbare in der Poesie die Wahrscheinlichkeit zum Grunde. ... (S.139//S.157) ... , so eröffnet sich uns eine neue Quelle des Wunderbaren. Denn da die Götter und Geister in allen Religionen ... , da sie an sich uncörperlich und unsicht- (S.157/S.158) bar sind, ... , so müssen die poetischen Vorstellungen aus der Welt der Geister in dem höchsten Grade wunderbar seyn.

Vgl. **Bodmer**, Johann Jakob(1698-1783) „Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie und dessen Verbindung mit dem Wahrscheinlichen, In einer Vertheidigung Johann Miltons Verlustes des Paradieses wider die Einwürffe der Herren Voltaire, Magny und anderer“(Zürich 1740) Faksimiledruck. Stuttgart. (Metzler) 1966. S.1: Critische Abhandlung von dem Wunderbaren ...

3) **Hölderlin**, Friedrich(1770-1843) „Brod und Wein“(1800-1801) Str.2. V.19-24: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe (=StA). Stuttgart (Kohlhammer) 1946-1977(Register 1985). Bd.2. S.90.

Wunderbar ist die Gunst der Hoherhabnen und niemand

Weiß von wannen und was einem geschiehet von ihr.

20

So bewegt sie die Welt und die hoffende Seele der Menschen,

Selbst kein Weiser versteht, was sie bereitet, denn so

Will es der oberste Gott, der sehr dich liebet, und darum

Ist noch lieber, wie sie, dir der besonnene Tag.

4) **Milton**, John(1608-74) „Paradise Lost“(1667). 2.Edition 1674. Indianapolis (Odyssey) 1962. S.61(Book III. V.18-22/V.26-29).

I sung of *Chaos* and *Eternal Night*,

Taught by the heav'nly Muse to venture down

The dark descent, and up to reascend,

20

Though hard and rare: thee I revisit safe,

And feel thy sovran vital Lamp; ...

...

... Yet not the more

Cease I to wander where the Muses haunt

27

Clear Spring, or shady Grove, or Sunny Hill,

Smit with the love of sacred Song; ...

Vgl. **Bodmer**: Johann Miltons Episches Gedichte von dem Verlohrnen Paradiese. Erste Aufl. 1732. Faksimiledruck der Bodmerschen Übersetzung von 1742(2.Aufl.). Stuttgart (Metzler) 1965. S.104-105(Das dritte Buch. Anfang).

SEy begrüßt heiliges Licht, du erstgebohrnes Kind des Himmels, ... Dich besuche ich izo wieder mit kühnern Flügeln, nach dem stygischen Pful entronnen bin, in dessen dunckeln Gründen ich (S.104/S.105) lange genug aufgehalten worden, alldieweil ich in meinem Fluge durch die äusserste und die mittlere Finsterniß, nicht mit des Orpheus Harffe, Stimme, und

DER MESSIASSÄNGER KLOPSTOCK (1724-1803).

Katsumi TAKAHASHI

1) Klopstock, Friedrich Gottlieb (1724-1803) „Brief an Bodmer vom 10. 8. 1748“: Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe. Hamburger Klopstock-Ausgabe (=HKA). Abteilung Briefe I. Briefe 1738-1750. Hrsg. von Gronemeyer, Horst. Berlin (Gruyter) 1979. S.14(Urtext)/S.201(Übersetzung).

Iam Tibi dicam, audi vero me, ut loquentem filium audit pater, ...

Nempe adolescenti puero Homerumque et Virgilium legenti, et subirascenti iam criticis Saxonum scriptis, Tua mihi Breitingerique scripta critica in manus venere. Lecta semel, seu hausta potius, cum ad dextram Homerus essent Virgiliusque, ad sinistram deinde, semper evolvida, iacuere. Quam saepe tunc desideravi promissam Tuam de Sublimi tractationem, et adhuc desidero. Miltonus vero (quem fortassis nimis sero vidissem, nisi transtulisses Tu ipsum,) quum improvisus in manus mihi incidisset, ignes ex Homero haustos excitavit penitus, animumque, ad caelum et religionis poesin, extulit. Quam saepe tunc imatinem poetae epici, quam in critico Tuo poemate duxisti, tuitusque sum et ... (S.14/S.201)

Ich muß Ihnen nun sagen — hören Sie mich, wie ein Vater seinen Sohn reden hört, ... Denn als ich in jungen Jahren Homer und Vergil las und mich schon über die kritischen Schriften der Sachsen zu ärgern anfang, da kamen mir Ihre und Breitingers kritische Abhandlungen in die Hand. Als ich sie gelesen oder vielmehr verschlungen hatte, lagen sie, wenn ich zur Rechten Homer und Vergil hatte, zum Nachschlagen immer zur Linken bereit. Wie oft habe ich dann Ihre versprochene Abhandlung über das Erhabene herbeigesehnt und tue es noch! Milton aber (den ich vielleicht allzu spät kennengelernt hätte, wenn Sie ihn nicht übersetzt hätten), der mir unversehens in die Hände fiel, hat die von Homer entzündeten Flammen hoch aufschlagen lassen und mich dazu geführt, den Himmel und die Religion zu besingen. Wie oft habe ich dann das Bild des epischen Dichters, das Sie in Ihrem kritischen Gedicht zeichneten, betrachtet und ...

2) Breitinger, Johann Jakob (1701-76) „Critische Dichtkunst“ (1740) Faksimile-Nachdruck. Stuttgart (Metzler) 1966. Bd.2: Fortsetzung / Der Critischen Dichtkunst. S.139-140 (Der vierte Abschnitt. Von der Kunst der Uebersetzung)

Milton muß uns in der Uebersetzung eben dieselben erhabenen und verwundersamen Bildnisse und Schildereyen, in eben der Ordnung, wie in dem (S.139/S.140) Originale, vorstellen, und in dem Gemüthe der deutschen Leser eben die hohen Begriffe und abwechselnden Bewegungen hervorbringen, welche sie wahrnehmen und empfinden würden, wenn ihnen die Zeichen bekannt wären, worinn der Ausdruck im Englischen eingekleidet ist.

Vgl. „Critische Dichtkunst“ Bd.1. S.130/S.131/S.132/S.133//S.139//S.157/S.158 (6. Abschn. Von dem Wunderbaren und dem Wahrscheinlichen).

Demnach ist das Wunderbare in der Poesie die äusserste Staffel des Neuen, ... (S.130/S.131) ... das Wunderbare muß immer auf die wirkliche oder die mögliche Wahrheit gegründet seyn, wenn es von der Lügen unterschieden seyn und uns ergetzen soll. ... (S.131/S.132) ... Das Wunderbare ist demnach nichts anders, als ein verummertes Wahrscheinliches. ... darum muß der Poet ... , muß er dem Wunderbaren die Farbe der Wahrheit anstreichen, und das Wahrscheinliche in die Farbe des Wunderbaren einkleiden ... (S.132/S.133) ... Kurtz, das

ZUSAMMENFASSUNG

„Als Klopstock England ignorierte, stand der schreckliche Blake in seinem Stolz auf.“(Anm.21). Um 1793 entstand dieser geistige Aufruhr gegen den „ehrwürdigen Vater der deutschen Poesie“(Anm.28), den Wordsworth und sein Freund Coleridge „mit einem Eindruck von Ehrfurcht“(Anm.28) Ende September 1798 in Hamburg besuchten, nachdem sie ihre epochemachenden „Lyrischen Balladen“(1.Aufl. 1798) dem Verleger überlassen hatten. Der stolze und einsame Blake nahm keine Rücksicht auf die anderen heute noch berühmteren Dichter, Schiller, Goethe, Wieland, Lessing und dergleichen, die in der Jahrhundertwende für die beiden Bannerträger der englischen Romantik nicht so „ehrwürdig“ waren, als der „Vater der deutschen Poesie“, Klopstock im hohen Alter. Für Coleridge war es auffallend, daß dieser „echt *deutsche* Milton“(Anm.42) „sehr wenig von Milton zu wissen schien“(Anm.22). Denn „er hatte Milton gelesen, in einer Prosa-Übersetzung“(Anm.22), möglicherweise zunächst in der Version des Ernst Gottlieb Berge von 1682 (Anm.26-27), dann in der ersten (1732) und hauptsächlich in der zweiten Fassung (1742) der Prosaübersetzung Bodmers, von der die Rede in Klopstocks Brief an Bqdmmer vom 10. August 1748 ist (Anm.1) : „Milton aber (den ich vielleicht allzu spät kennengelernt hätte, wenn Sie ihn nicht übersetzt hätten), der mir unversehens in die Hände fiel, hat die von Homer entzündeten Flammen hoch aufschlagen lassen und mich dazu geführt, den Himmel und die Religion zu besingen.“(Miltonus ... ignes ex Homero haustos excitavit ...)

Im Unterschied zum englischen Milton, der nach Blake („Milton“ 1804) „von der allgemeinen Krankheit und Infektion aus den albernen griechisch-römischen Gladiatoren bändigt“(Anm.12) sei, bleibt der deutsche, „von der sinnlichen wie von der sittlichen Seite betrachtet, ein reiner Jüngling“(Anm.36), der einfach nach der „Erhabenheit der Bibel“(Anm.12) und solcher „Größe der Begeisterung“(Anm.14) verlangt und fast an keiner „allgemeinen Infektionskrankheit“ der rhetorischen Antike leidet, und wird „der Abgott der Jugend“: „Alle Gefühle, die er, und zwar so innig und so mächtig in uns zu erregen weiß, strömen aus übersinnlichen Quellen hervor. ... Keusch, überirdisch, unkörperlich, heilig wie seine Religion ist seine dichterische Muse, und man muß mit Bewunderung gestehen, daß er, wiewohl zuweilen in diesen Höhen verirret, doch niemals davon herabgesunken ist.“(Anm.35: Schiller „Über naive und sentimentalische Dichtung“ 1795-1796). Bemerkenswert ist Klopstocks unschuldige Geistesbildung, die dem evangelischen „Geist Schöpfer“(Anm.9) die „ignes ex Homero haustos“ harmonisch entgegensetzt. Von dieser paradiesischen Unschuld nimmt Hölderlins „seeliges Griechenland“(Anm.11: „Brod und Wein“ 1800-1801) seinen Ausgang, wie von Winckelmanns bahnbrechenden „Gedanken über die Nachahmung der griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst“(1755). Schon im Alter von 17 Jahren idealisiert Hölderlin seinen Wegbereiter, der neben dem äolischen Epinikiensänger bestehe: „Ists schwacher Schwung nach Pindars Flug? ist's / Kämpfendes Streben nach Klopstocksgröße?“(Anm.44). Wenn man aber den Messiassänger ironisiert, „so verliert sich vieles, sehr vieles von jener so enthusiastischen Liebe, aber nichts von der Achtung, die man einer so einzigen Erscheinung, einem so außerordentlichen Genius, einem so sehr veredelten Gefühl, die der Deutsche besonders einem so hohen Verdienste schuldig ist.“(Anm.35)

Der Messiassänger Klopstock (1724-1803)
Le chanteur du «Messie», Klopstock (1724-1803)

高橋克己
TAKAHASHI, Katsumi

*Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät
Section de Philologie allemande de la Faculté des Lettres*

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KÔCHI (Kôtzschi).
JAPAN 1997. VOL.46. GEISTESWISSENSCHAFTEN.
BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI (Kôchi).
JAPON 1997. TOME XLVI. SCIENCES HUMAINES.

INHALT : TABLE DES MATIÈRES

Der Messiassänger Klopstock (1724-1803) : Le chanteur du «Messie», Klopstock (1724-1803)	
Summarium japonicum	Seite:page 61
(1)Das „Erhabene“ und das „Wunderbare“ : Le «sublime» et le «merveilleux»	62-63
(2)Die „Dichtkunst“ und der „Geist Schöpfer“ : L'«art poétique» et l'«Esprit Créateur»	63-65
(3)Der „Plan“ und die „Idee“ : Le «plan» et l'«idée»	65-67
(4)Der „Vater der deutschen Poesie“ : Le «père de la poésie allemande»	67-69
(5)Der „musikalische Dichter“ : Le «poète musical»	69-72
Anmerkungen : Notes	72-90
Zusammenfassung / Sommaire	91-92
Inhalt : Table des matières	92

*Diese 32 Seiten im vertikalen Druck : Ces 32 pages imprimées verticalement

SOMMAIRE

L'auteur du «Messie»(1748-1773) était célèbre par la pureté de son âme éthérée: «Les femmes étonnent, belles comme les séraphins de Klopstock, terribles comme les diables de Milton.» (Diderot «Sur les Femmes» 1772: Note 39). Aussi Chateaubriand porte son attention sur le même point de vue: «Ici Milton, presque aussi gracieux que Virgile, l'emporte sur lui par la sainteté et la grandeur. Raphaël est plus beau que Vénus, ... Voici un ange mystique de Klopstock: ... L'Éternel le nomme *Elu*, et le ciel *Eloa*. ... Raphaël est l'ange *extérieur*; *Eloa* l'ange *intérieur*.» («Génie du christianisme» 1802: Note 37). Il est remarquable dans ce cas que cet intérieur séraphique s'harmonise bien avec les «ignes ex Homero haustos»(feux sortis d'Homère). Cela veut dire que Klopstock échappe à l'«infection provenant des sots gladiateurs grecs et latins» qui a «dompté Milton» d'après Blake («Milton» 1804: Note 12). C'est presque seul la «fougue animée d'un souffle(pneuma) divin» qui unit le «Messie» et l'«Illiade», c'est-à-dire «cette élévation de style toujours égale et qui nulle part ne subit de dépression» («Du Sublime»: Notes 16-17). C'est ainsi que l'auteur du «Werther»(1774) estime beaucoup le chanteur du «Messie»: «Il était un jeune homme pur sur le plan de la sensibilité aussi bien que de la moralité.» («Poésie et Vérité» Livre X. 1812: Note 36).